

# 向町盆地周辺の縄文時代晩期の遺跡動態

小林圭一

## 1 はじめに

向町盆地（別称：小国盆地）は山形県北東端に位置する山中の小盆地で、行政区画では最上郡最上町が該当する。盆地東端は奥羽脊梁山脈屈指の低まりである「さかいだごえ堺田越」を経て宮城県えあいがわの江合川水系のおおやがわ大谷川に連絡しており、江戸時代より「出羽仙台街道」として日本海側と太平洋側を結ぶ物流の要衝となってきた。縄文時代においても宮城県側の遺跡と密接な関係を有していたと推定され、向町盆地の縄文時代中期には秀麗な完形土器が多く出土した水木田遺跡に象徴される有力な地域圏が形成されていた。

2023年9月4～10日の短期間ではあったが、栗島義明氏等の明治大学のグループが同盆地内の縄文時代晩期を代表する材木遺跡を発掘調査した（栗島編 2024）。三澤裕之氏によって紹介された同遺跡の緑色石英製玉類（三澤 2020）の実態解明に主眼を置いた小規模調査で、2×12 m トレンチのみが開設された。遺構は確認できなかったが、微細遺物を回収するため土壌水洗選別を実施した結果、滑石製勾玉と共に緑色石英片 30 点余りを採取することができた。同石材を用いた装身具類は材木遺跡を中心に半径 50 km 圏内の遺跡に同心円状に分布しており（図 4）、威信的な儀礼交換の象徴である「ヒスイ」の代用品として、局所的に流通していた様相が推定されていた。そして今回の調査で、同石材の原石形状に近い資料から完成品までの一連の製作工程の存在が確認され、材木遺跡で小玉や勾玉として製品化されていたことが確定的となった。

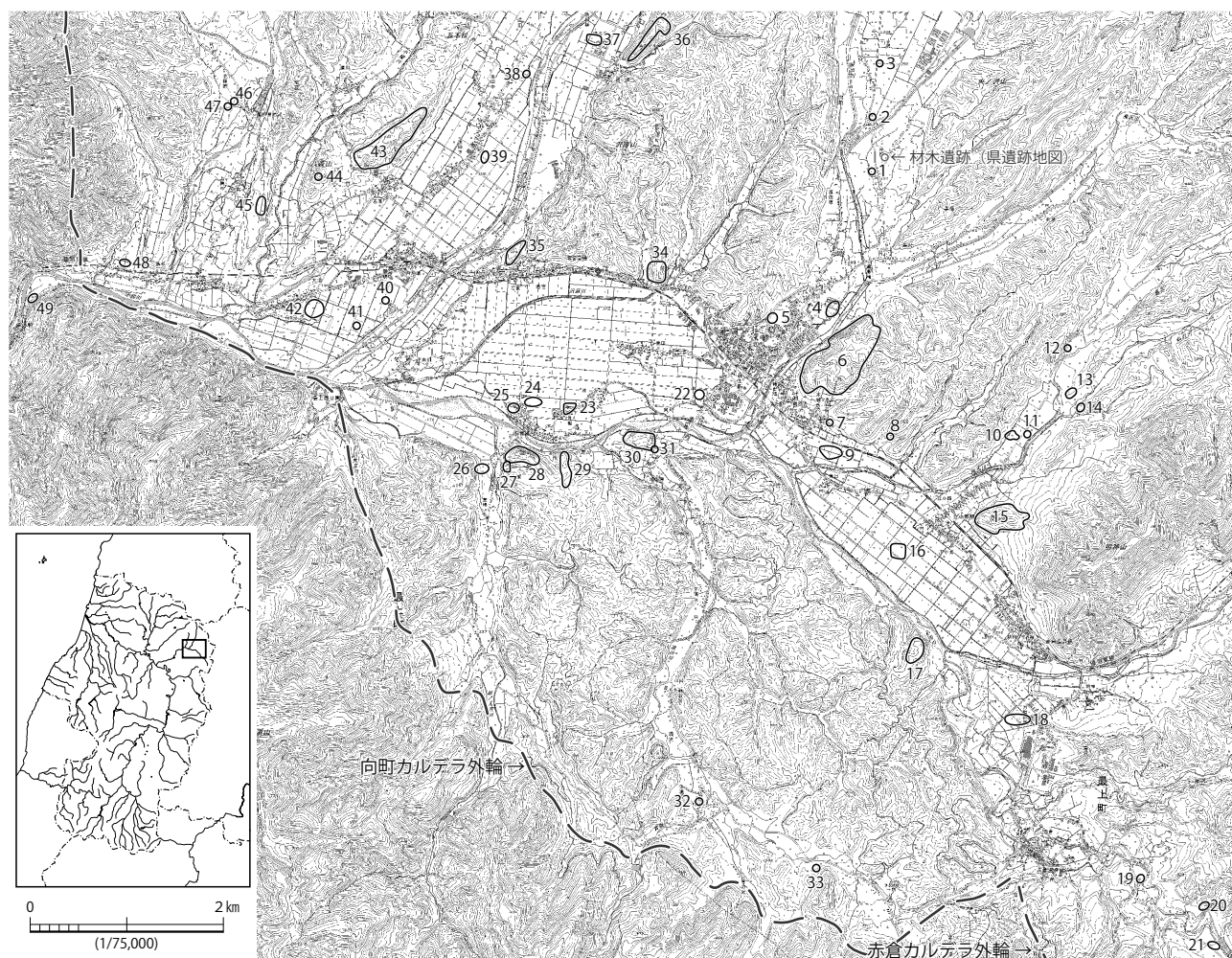
筆者は今回の発掘調査に 1 日だけ参加し報告書の作成にも関わったが、紙数と時間の制約から十分意を尽くすことができなかった。本稿では筆者が担当した「材木遺跡周辺の晩期遺跡」を大幅に改稿すると共に、同遺跡の調査成果を踏まえた向町盆地の晩期遺跡の特性について考察した。

## 2 向町盆地の概要

### (1) 向町盆地の地理的特徴

向町盆地は奥羽脊梁山脈のほぼ中央に位置する。この地域は秋田・岩手・山形・宮城県各県の境界が交錯し、「栗駒地熱地域」として国内有数の地熱地帯を形成しており、新第三紀後期中新世から更新世末期の約 4 万年前まで火砕流の噴出を伴う大規模な噴火を発生させたカルデラ（院内・三途川・栗駒山南麓・鬼首・花山・向町・赤倉・中山平・鳴子等）が密集する。向町盆地はこのカルデラ群の南端に位置し、約 60～80 万年前の噴火で生成したカルデラ盆地で、カルデラの外輪は長径 12 km、短径 10 km の東西に長い楕円形を呈する（図 5）。東側により古い赤倉カルデラ（東西約 9 km、南北約 10 km）が連続するが、両者の境界は明瞭でない。盆地の四方は標高 800～1,300 m 級の急峻な山並みで囲まれ、カルデラ内は裏山と称される標高 300～400 m の丘陵地で占められている。この丘陵地は陥没した凹地に火山砕屑物と湖底堆積物が埋積し、さらに上部を 39 万年前頃に隣接する鬼首カルデラから流出したとされる火砕流堆積物（満沢層）が覆っており（大竹 2000）、その後の侵食作用で緩やかな丘陵地形が形成されたと考えられている。

盆地を貫流する小国川は、宮城県境に聳える脊梁山脈の山嶺に源を発する流路延長約 49 km の最上川の支流で、天然鮎の溪流釣りスポットとして知られる清流である。赤倉カルデラ内に当たる上流部は下刻作用で深い峡谷を穿って曲流が著しいが、盆地谷口の赤倉温泉付近（標高 250 m）を過ぎると次第に川幅を広げ谷底を浅くして北西方向に緩やかに流れ、堺田越から西流した神明川を合わせる。そして鳥出川とりでを合わせて絹出川きぬで合流点からは西側に向きを変え、右岸に白川しら・大横川おおよこ、左岸に満沢川みづざわ・杉ノ入沢川・大又川を肋骨状に合わせ、盆地南部の丘陵地帯を浸食しながら 7 km 程度直進する。盆地の出口となる最上町鶴杉付近（標高 160 m）を抜けると南西方向



No.	遺跡名	遺跡番号	種別	時代
1	材木遺跡	362-043	集落跡	縄文時代(晩期)
2	山野神遺跡	362-028	集落跡	縄文時代
3	一本杉北遺跡	362-045	集落跡	縄文時代
4	水上遺跡	362-046	集落跡	縄文時代(前期~晩期)
5	愛宕前遺跡	362-008	集落跡	平安時代
6	小国城跡	362-031	城館跡	戦国期~近世
7	本城遺跡	362-029	集落跡	縄文時代
8	平沢遺跡	362-044	集落跡	縄文時代
9	要害館跡	362-006	城館跡	戦国期
10	かっぱ遺跡	362-019	集落跡	縄文時代(中期~後期)
11	大沢口遺跡	362-020	集落跡	縄文、平安:(登録抹消)
12	油沢遺跡	362-030	集落跡	縄文時代(後期~晩期)
13	中首遺跡	362-036	集落跡	縄文時代
14	米入遺跡	362-025	集落跡	縄文時代
15	富沢館跡	362-048	城館跡	戦国期
16	氏家館跡	362-040	城館跡	戦国期
17	比丘尼館跡	362-035	城館跡	戦国期
18	万騎の原遺跡	362-015	集落跡	縄文時代
19	荒沢遺跡	362-013	集落跡	縄文時代
20	へそ岩遺跡	362-053	集落跡	縄文時代(晩期)
21	菅の平遺跡	362-049	集落跡	縄文時代
22	熊の前遺跡	362-023	集落跡	縄文時代(中期)
23	曾橋跡	362-018	城館跡	戦国期
24	水木田遺跡	362-001	集落跡	縄文時代(中期)
25	堀の畑館跡	362-027	城館跡	戦国期

No.	遺跡名	遺跡番号	種別	時代
26	まないた原遺跡	362-003	集落跡	縄文時代(中期)
27	橋の裏遺跡	362-004	集落跡	縄文時代
28	物見の橋跡	362-005	城館跡	戦国期
29	月橋跡	362-002	城館跡	戦国期
30	赤館跡	362-010	城館跡	戦国期
31	細の原遺跡	362-037	集落跡	縄文時代
32	小松原 A 遺跡	362-038	集落跡	縄文時代
33	小松原 B 遺跡	362-052	集落跡	縄文時代
34	半兵衛館跡	362-026	城館跡	戦国期
35	太郎田館跡	362-034	城館跡	戦国期
36	東法田の館跡	362-051	城館跡	戦国期
37	橋の内橋跡	362-050	城館跡	戦国期
38	新田遺跡	362-012	集落跡	縄文時代
39	げんだい遺跡	362-041	集落跡	縄文時代(中期~晩期)
40	森の越遺跡	362-021	集落跡	縄文時代、平安時代
41	宮の下遺跡	362-014	集落跡	縄文時代(後期)
42	小館跡	362-016	城館跡	戦国期
43	志茂の手館跡	362-007	城館跡	戦国期
44	水の手橋跡	362-011	城館跡	室町時代
45	鶴杉遺跡	362-033	集落跡	縄文時代
46	狐穴口遺跡	362-024	集落跡	縄文時代(晩期)
47	高すず遺跡	362-042	集落跡	縄文時代(晩期)
48	戦沢遺跡	362-032	集落跡	縄文時代
49	立石遺跡	362-022	集落跡	縄文時代

図 1 向町盆地周辺の遺跡位置図(縮尺:1/75,000)

に流路を変えて、脊梁山脈の西端に約6 kmの深い峡谷を穿って流下し、狭長な舟形盆地を経て舟形町長者原（標高50 m）で最上川に合流する。

向町盆地内の平坦部は西流する小国川とその支流に沿って開け、東西幅約11 km、南北幅1～8 kmを測り、主に段丘と谷底平野で構成される。特に小国川右岸や北岸の支流沿いには、扇状地を開析した平坦な低位段丘が発達し、縄文時代の遺跡の多くが立地しており、盆地北部には丘陵の山脚の先端に細長く突き出した中位・高位段丘も認められる（図5）。

盆地東端の明神川に沿って遡ると、標高350 mの堺田越（別称中山越）に通じている。奥羽脊梁山脈では秋田県横手市一岩手県西和賀町間の標高296 mの「黒沢の鞍部」（小島・田村ほか編1997：41～42頁）に次ぐ低まりで、勾配が緩やかで谷幅も広く、宮城県側との交通の要衝となっており、現在は国道47号線とJR陸羽東線（1917年全線開通）が並走し県境にトンネルが存在しない。しかし東方の標高が低いため、盆地自体は夏季に冷涼な北東風であるヤマセの影響を受けやすい地理的環境下にある。また冬季の積雪が多く日照時間も少なく、融雪時期が遅い地域となっている。

## （2）向町盆地の縄文時代の遺跡

最上町内の登録遺跡は53遺跡を数えるが、向町盆地を網羅した図1には49遺跡が図示されている。49遺跡のうち縄文時代が31遺跡と大半を占め、中世～近世の城館跡が17遺跡と続き、残るのは平安時代の愛宕山遺跡（5）のみである。図郭外の町内の4遺跡（狐塚・長原・瀬見・屋敷平遺跡）はいずれも縄文時代の遺跡である。縄文時代の遺跡の多くは、小国川とその支流沿いの河成段丘上に立地している。時期が判明している遺跡は、早期1遺跡、前期5遺跡、中期12遺跡、後期14遺跡、晩期10遺跡で、中期以降に遺跡の数が増加し規模も大きくなる（山形県埋文セン2003a）。

向町盆地内で最も古い生活の痕跡は、水木田遺跡が位置する月楯地内で採集された細石刃核である。1960年頃に月楯在住の中学生によって採集されたが、出土地点の特定に至っておらず遺跡としては未詳である。旧石器時代末期の遺物が1点のみで、旧石器時代の遺跡が多数確認されている近隣の新庄盆地や宮城県北西部とは対照的な在り方を示している。後続する早期の遺跡は小国川

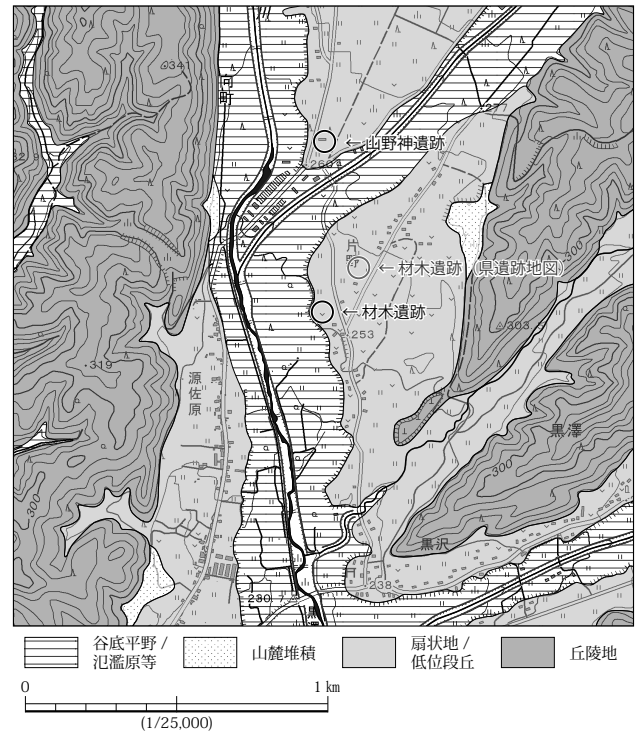


図2 材木遺跡周辺地域の地形分類図（縮尺：1/25,000）

上流域の屋敷平遺跡（図郭外）のみで、前期の遺跡は水上遺跡（4）、一本杉北遺跡（3）、熊の前遺跡（22）、平沢遺跡（8）等が該当する。特に水上遺跡では大木6式後半期の竪穴住居跡が検出されている（山形県教委1981b）。

中期は盆地中央の水木田遺跡（24）を中心に遺跡が展開する。同遺跡は1978年に発掘調査が実施された大木7b～8a式主体の大規模集落跡で、竪穴住居跡8棟（大木7b式1棟、同8a式6棟）と土坑、集石、配石遺構等が検出された（山形県教委1984）。中でも4×16 mの範囲で一括廃棄された90点に及ぶ大木7b式の完形土器が特出しており、「東北地方の縄文中期文化を知る上で貴重な資料」であるとして、2011年に国の重要文化財に指定されている。大木7b式土器が卓越するが、関東の五領ヶ台式の影響を受けた土器や東北北部の円筒上層b式に類似した土器、北陸の新崎式の土器片等、他地域との交流を窺わせる土器が出土している。

水木田遺跡の西方1.5 kmの熊の前遺跡（22）では、1977年の発掘調査で大木7b～8a式期の竪穴住居跡3棟が検出され、該期土器の優品も多く出土した（山形県教委1981a）。鳥出川沿いの後期主体のかっぱ遺跡（10）では、旧河道跡（SG21）から大木8a式土器がま

とまって出土した(山形県埋文セン 2003b)。1985 年に発掘調査された森の越遺跡(40)では大木 8a 式の土器片が出土し、土坑等の遺構も検出された(山形県教委 1986)。上記した遺跡はいずれも水木田遺跡の分村的な性格が想定される(図 6)。しかし後続する中期後葉(大木 9～10 式期)になると、盆地内に水木田遺跡のような突出した遺跡は姿を消し、げんだい遺跡(39)、水上遺跡(4)、まないた原遺跡(26)に活動の痕跡を留めるのみとなる。大木 8b～9 式にかけた時期の山形県北東部では、これまでの大規模集落への集住から、小さな集落に分散した居住システムに転換した可能性が指摘されており、後期初頭まで存続した遺跡は非常に少ない(小林 2019: 46～48 頁)。

後期の遺跡の分布は小国川北側にほぼ限られ、鳥出川・絹出川・白川流域に晩期のような規則的な配置が確立する。鳥出川沿いのかっぱ遺跡(10)は 2000 年に発掘調査され、後期前葉(南境 2 式期)～後期中葉(宝ヶ峯 2 式期)までの竪穴住居跡 13 棟、掘立柱建物跡 7 棟が検出され、盆地内の基幹集落となっていた(山形県埋文セン 2003b)。完形土器の優品が多く出土しており、同遺跡の出土土器を基に水戸部秀樹氏が後期前半期の「かっぱ編年」を提示している(水戸部 2004)。絹出川沿いの水上遺跡(4)は、1976・1980 年に発掘調査が実施され、後期前半の竪穴住居跡 12 棟(第 1 次: 5 棟、第 2 次: 7 棟)が検出されている(山形県教委 1980・1981b)。住居跡は重複や拡幅が顕著であるが、かっぱ遺跡に先行した後期前葉(宮戸 I b 式期)が多く占めている。その他に白川沿いの宮の下遺跡(41)では 1985 年の発掘調査で、後期中葉(宝ヶ峯 1・2 式期)の竪穴住居跡 4 棟が検出されている(山形県教委 1986)。小国川南岸の杉ノ入沢川沿いの楯の裏遺跡(27)では 1985 年の発掘調査で竪穴住居跡 1 棟が検出され、宮城県南部の南境 1 新式～2 式に特有の内面格子目文土器が出土している(最上町教委 1986)。山形県北東部では、後期中葉宝ヶ峯 2 式までは遺跡が多く認められるが、後続の宝ヶ峯 3 式の遺跡は極端に少なく、先行型式から継続した遺跡も殆ど認められない。両型式の間に画期が想定され、その後遺跡数が増加に転じるのは後期後葉瘤付土器第 II 段階(金剛寺 1 式)以降で、晩期に継承されていった。

向町盆地の弥生時代～古代の遺跡は非常に少ない。弥生時代の遺跡は宮城県北西部で多数周知されているのに対し、向町盆地ではげんだい遺跡(39)が唯一の遺跡となる。しかし同遺跡に明確な弥生土器を指摘することはできない(註<sup>1</sup>)。盆地内に古墳時代の遺跡は確認できず、続く古代も水木田遺跡(24)を含め小規模な 4 遺跡に留まっている。古代遺跡が低調なのは、江合川水系から向町盆地へのルートが律令国家の制定した東山道の駅路から大きく逸れたことに関連しており、古代東北経営の辺境地における実相を反映したとも言えるであろう。また夏季の涼やかな天候(ヤマセ)の影響を受けやすいといった自然条件も要因であったと考えられる。

### 3 向町盆地内の晩期遺跡

材木遺跡(1)は絹出川左岸の河岸段丘(現河床面との比高差は約 6 m)に立地する(図 2)(註<sup>2</sup>)。同遺跡は 1973 年の第一次調査の出土品から、大洞 BC～A' 式期に営まれ、大洞 C2～A 式に主体があったことが判明している(小林 2001)。今回の調査でも大洞 A2 式の良好な土器群が出土しており、従来の見解を追認している。

向町盆地では東西幅約 10 km の範囲に晩期の遺跡が 10 遺跡確認されており、多くは小国川北岸の各支流を 2～3 km 遡った低位段丘面に立地する(図 1)。西側から大横川沿いに狐穴口遺跡(46)、白川沿いにげんだい遺跡(39)、絹出川沿いに材木遺跡と水上遺跡(4)、鳥出川沿いに油子沢遺跡(12)が、2.5～4 km 間隔で並列する。各支流沿いに生活領域が形成されていたと推定され、小国川に沿った盆地底に晩期遺跡は認められない。

大横川右岸の狐穴口遺跡は大洞 BC～C2 式主体の遺跡で、多数の土器片と石皿・凹石・石棒等、そして緑色石英剥片 1 点が採集されている。小さな谷を介して西側に接した高すず遺跡も大洞 BC～C2 式期の遺跡であり、両遺跡は同一集落跡とみなされている。

白川右岸のげんだい遺跡は後期後葉～晩期後葉までの長期間継続した遺跡である。戦後の基盤整備で晩期の遺物が多く出土し、ほぼ壊滅したとみられていたが、1987 年の発掘調査で瘤付土器第 II 段階～大洞 A' 式期の遺物が出土した(山形県教委 1988)。胎児～新生児を埋葬したと推定される埋設土器群が検出され、特に B 区では径 4 m の範囲に 13 基の埋設土器が集中していた。

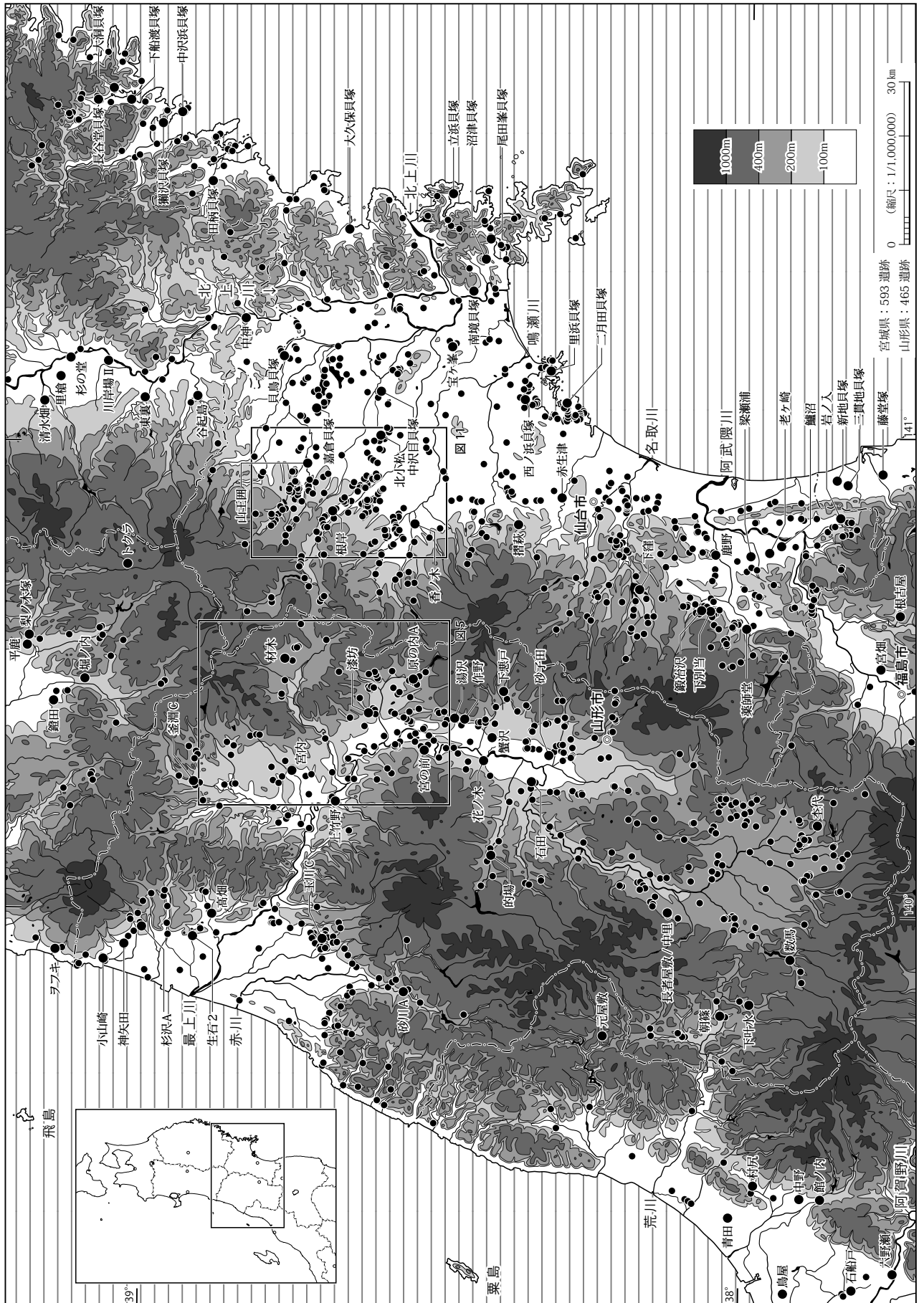


図3 宮城県・山形県の縄文時代晩期の遺跡分布図 (縮尺: 1/1,000,000)

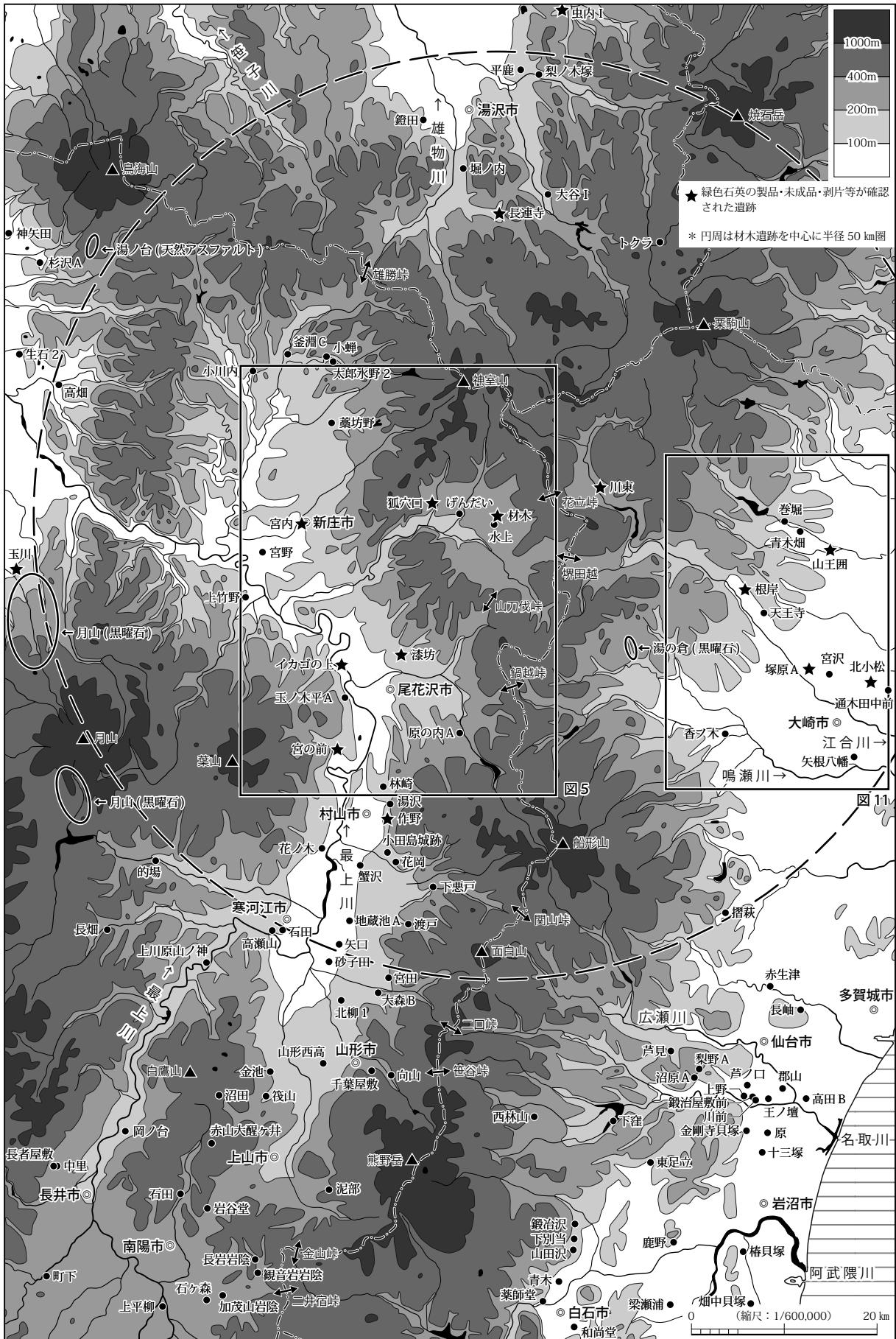


図4 東北中部の縄文時代晩期の主要遺跡と緑色石英を確認した遺跡 (縮尺: 1/600,000)

墓域を有した規模の大きな集落跡と推定され、大洞 A2 式土器の優品もみられ、白川沿いの有力遺跡として材木遺跡と並存の関係にあった。

材木遺跡の南方 1.5 km の絹出川右岸には水上遺跡が位置する。前記したように後期前半期の規模の大きな集落遺跡であるが、晩期では大洞 BC ～ A 式の土器片が少量認められており、材木遺跡の分村的な性格が推定される。

鳥出川沿いでは、支流の黒沢右岸の油子沢遺跡が後期後葉～晩期前葉（瘤付土器第Ⅲ段階～大洞 BC 式）の有力遺跡となる。舌状に張り出した台地の端部に位置し、開田工事に際して後・晩期の遺物が多数出土たとされている。黒沢と支流仏沢川との合流点には、中首遺跡（13）と米入遺跡（14）が仏沢川を挟んで対置する。中首遺跡（別称：牛首遺跡）は中期の遺跡であるが瘤付土器が採集されており、米入遺跡は後・晩期の遺跡とされている。

堺田越に通じる明神川沿いには、狐塚遺跡（図郭外）が位置する。中～晩期の遺跡で遺物の散布範囲が約 50,000 m<sup>2</sup>（東西 500 m × 南北 100 m）に及んでおり、晩期では大洞 BC 式土器が認められている。また小国川上流域の穿入蛇行した溪谷沿いの段丘には、へそ岩遺跡（20）が位置する。詳細は不明だが、後期後半～晩期前葉（瘤付土器第Ⅲ段階～大洞 B 式）の土器片が多く採集されている。

晩期と比較するため、山形県北東部の縄文中期前葉～中葉（大洞 7b ～ 8b 式期）の遺跡分布図を提示した（図 6）。「西ノ前型土偶」に象徴される当該域が最も隆盛を極めた時期に相当する。基幹集落を中心に半径 5 km の同心円を描出したが、向町盆地では水木田遺跡が盆地中央の小国川右岸の東西間経路の中継地に位置している。周囲に分村を配置した構成となっており、各支川毎に規則的に分散し生活領域を形成していた晩期遺跡とは、対照的な在り方を呈している。

#### 4 向町盆地周辺の晩期遺跡の様相

向町盆地周辺に当たる山形県北東部と宮城県北西部の晩期の様相を考察する。図 3 には筆者が渉獵し得た山形県と宮城県の晩期遺跡を総てプロットした<sup>(註3)</sup>。宮城県 593 遺跡、山形県 465 遺跡で、宮城県が 100 遺跡以上多くなるが、分布調査の精度に起因していることは否

めない。秋田県南端の 27 遺跡は『秋田県遺跡地図情報』〈<https://common3.pref.akita.lg.jp/heritage-map/>〉に基づいてプロットしたが、岩手・福島・新潟県は公表された遺跡情報が限定的で、晩期の総ての遺跡を網羅することができなかつたため、主要遺跡のみをプロットした。因みに宮城県全体の晩期遺跡の密度は 0.08 遺跡 / km<sup>2</sup>、山形県全体は 0.05 遺跡 / km<sup>2</sup>となる。

図 5 は山形県の北東部に当たる最上地方の東側と村山地方の北部を示した地図であるが、平坦地として上記の向町盆地の他に新庄盆地と尾花沢盆地が存しており、図郭内（面積：1,564 km<sup>2</sup>）には晩期の 105 遺跡をプロットした。

##### (1) 新庄盆地の晩期遺跡

新庄盆地は更新世の扇状地で、河岸段丘が卓越し沖積低地の占める割合が低く、盆地内部には標高 100 ～ 300 m の丘陵が発達する。同盆地内の基幹集落となるのは宮内遺跡である。泉田川扇状地の扇端、指首野川と戸前川が合流する低位段丘上に立地し、遺物の広がりや遺物量から規模の大きな集落跡とみられており、1973 年の調査では大洞 B ～ C2 式期に主体があった（新庄市 1989）。盆地南半のほぼ中央に位置することから、周囲の丘陵に点在する遺跡が生活領域の範囲を示していると考えられる。

最上川に合流する鮭川の支流である真室川を遡ると、左岸の段丘面に釜淵 C 遺跡が位置している（図 3・4 に図示、図 5 の左上端図郭外）。同遺跡は瘤付土器第Ⅳ段階～大洞 A' 式まで長期間にわたって継続した遺跡で遺物量も多く、山間河谷の基幹集落であったと考えられる（山形県埋文セン 2003c）。同遺跡で 1915 年に発見された完形で中空の結髪土偶（大洞 A2 式期）は、1965 年国の重要文化財に指定されている。同遺跡から真室川を遡ると秋田県の横手盆地へ連なる雄勝峠（標高 427 m）に至ることから、その中継地としての役割が想定され、南北方向の主要経路上に位置していたのであろう（図 4）。

上竹野遺跡は最上川左岸の銅山川との合流点付近の段丘上に立地しており、厳密には新庄盆地に該当しない（図 5）。1954 年の発掘調査で大洞 A' 式～弥生中期初頭の土器の優品が出土したが、2015・2016 年の調査では内陸部の最北限となる再葬墓が検出された（山形県埋文セン 2019）。瘤付土器第Ⅲ段階の竪穴住居跡 2 棟が検

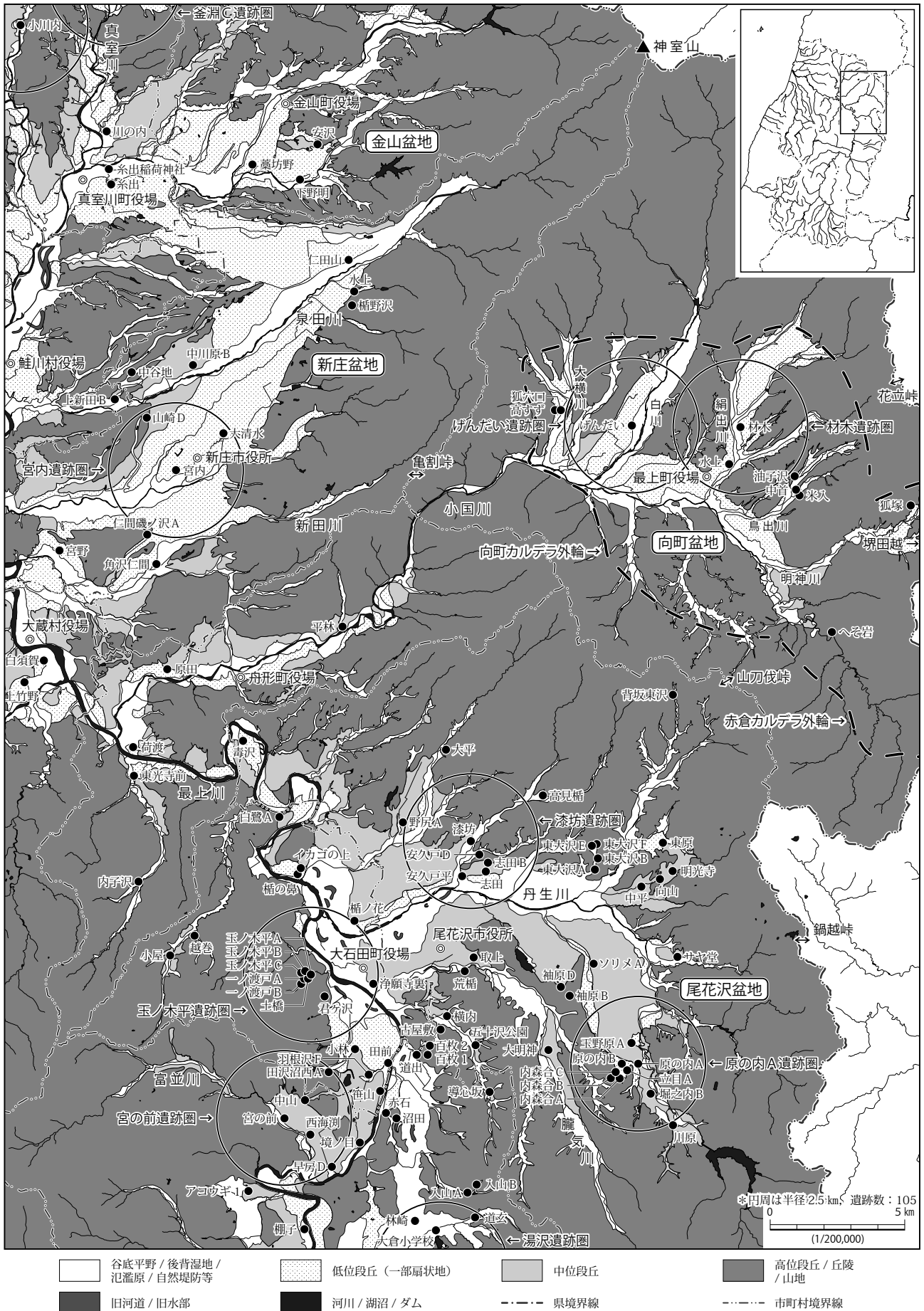


図5 山形県北東部(向町・新庄・尾花沢盆地)の縄文時代晩期の遺跡分布図

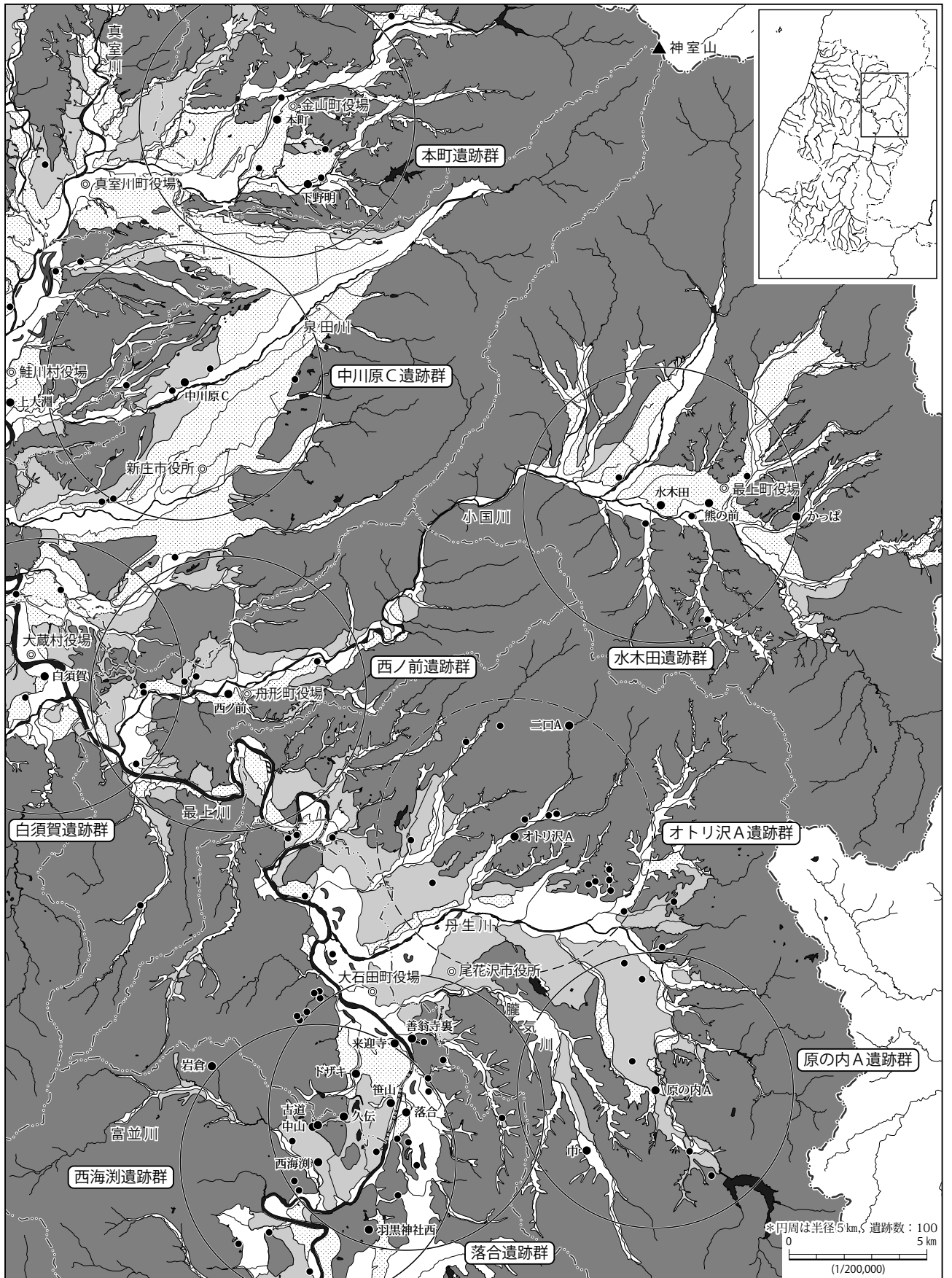


図6 山形県北東部(向町・新庄・尾花沢盆地)の縄文時代中期前葉・中葉(大木7a~8b式期)の遺跡分布図

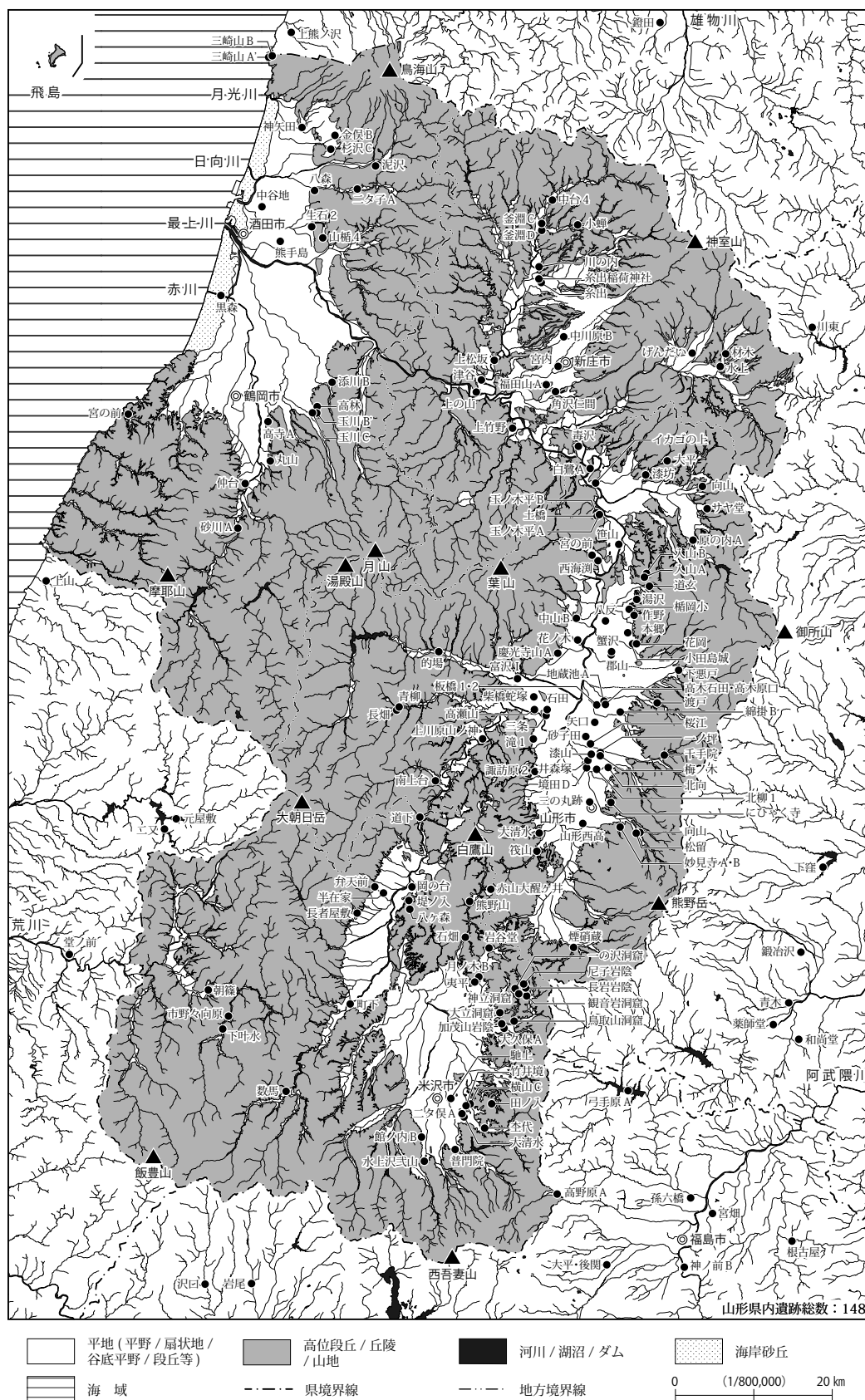


図 7 山形県内における縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前葉(大洞A式～鱸沼式期)の遺跡分布図

出され、大洞 C1 古式の土器も認められたが晩期前半期までは低調で、遺跡が隆盛を迎えたのは晩期末葉大洞 A2 式～弥生中期初頭山王Ⅲ層式にかけた時期である。再埋葬を含む土器埋設遺構 10 基、竪穴住居跡 1 棟、土坑墓等が検出されており、最上地域では数少ない弥生時代の集落跡として特筆され、大洞 A2 式期は材木遺跡と並存の関係にあった。壺形土器を埋設した土坑(SK523)の底面からヒスイ製の管玉、合口土器棺(SK525)内からヒスイ製の垂飾が出土したが、いずれも弥生時代前期に位置づけられている。また晩期末～弥生初頭の中空の刺突文土偶も注目される(菅原・長澤 2018)。

新庄盆地の晩期では、宮内遺跡を中心に遺跡が展開していたと推定される。周囲の丘陵の森林資源や河川資源に依存した生業活動だけでなく、庄内平野と宮城県北西部を結ぶ東西方向のルート、また秋田県の横手盆地と尾花沢盆地・山形盆地を結んだ南北のルートとの結節点としての地の利があったと考えられる。山間の規模の大きな集落であった釜淵 C 遺跡は、横手盆地への中継地として機能していたのであろう。

## (2) 尾花沢盆地の晩期遺跡

尾花沢盆地は新庄盆地と山形盆地に挟まれた内陸盆地群の一つで、村山地方の北部に位置する。段丘地形が顕著に発達しており、上位から猿羽根山Ⅰ面、猿羽根山Ⅱ面、尾花沢Ⅰ面、尾花沢Ⅱ面の 4 段の段丘面に区分され、縄文遺跡の多くは最も広く展開した尾花沢Ⅰ面(中位段丘)に立地する(図 5)。盆地は最上川を挟んで東西に二分され、盆地東部は御所山(船形山)から流下した丹生川に沿う段丘・低地、盆地西部は最上川に沿う南北に伸びた段丘・低地によって占められる。晩期の遺跡は河川沿いの段丘縁辺と背後の山裾、最上川との合流点に点在する。

尾花沢盆地では大洞 BC 式期まで富並川左岸の宮の前遺跡が突出しており、北方 5 km に位置する玉ノ木平 A 遺跡が並存の関係にあった。宮の前遺跡は山形県を代表する晩期の遺跡で、後期中葉宝ヶ峯 3 式に集落が開始されるが、盛行するのは瘤付土器第Ⅱ段階以降で晩期末葉の大洞 A' 式まで継続した(山形県埋文セン 1995・1999)。1993 年調査の第 1 調査区の土坑墓 SK138 の底面から、副葬された磨製石斧と緑色石英製勾玉が出土した(報告書にはヒスイ製と記載)。玉ノ木平 A 遺跡

(大石田町教委 1993) は黒滝沢川遺跡群の中核であるが、山間の立地から宮の前遺跡の分村的な役割を担っていたと考えられ、遺跡の消長もほぼ同期した。ところが大洞 C1 式期になると、丹生川左岸の盆地谷口に位置する原の内 A 遺跡(別称:鶴子遺跡)と、支流牛房野川右岸の漆坊遺跡(別称:田沢遺跡)が台頭し、大洞 C2～A 式期には盆地内に三つの有力な遺跡が並存していた(図 5)。原の内 A 遺跡は中期の大規模集落跡で晩期の内容は不明瞭であるが、漆坊遺跡は大洞 BC 式に集落が始まり、大洞 C2～A 式にピークを迎えている。しかし 1981 年調査の報告書(尾花沢市教委 1982)は大洞 C2 式土器に偏重しており、同 A 式が少ない印象を受ける。同遺跡では岩版が 37 点出土し製作遺跡であった可能性が指摘され、また瓢箪形の土製赤彩小玉類(図 7)が 14-21 G でまとまって出土した。本来は紐で繋がっていたと推定され、埋葬施設が存した可能性を窺わせる。当該玉類は宮城県北西部に局所的な拮がり知られており(相原ほか 2021)、該域との交流を示唆する事例と言えるであろう(註 4)。

宮の前・漆坊・原の内 A 遺跡は直線でそれぞれ 10～13 km の位置関係にある。いずれも河川沿いに立地し、その背後に丘陵・山地が迫った生態系の遷移帯となっており、森林生態系と河川生態系の資源に依存した生業活動が推定される。宮の前遺跡は最上川西岸と葉山山麓を含んだ区域、漆坊遺跡は丹生川下流域と北側山地を含んだ区域、原の内 A 遺跡は丹生川中流域と周辺の丘陵・山地を含んだ区域を生活領域にしていたと考えられる。

最上川と支流の合流点にも特徴的な遺跡の分布が認められる(図 5)。野尻川との合流点に位置するイカゴの上遺跡は、東西 300 m×南北 200 m と比較的規模が大きく、大洞 A2 式の中空土偶の優品が採集されている(大石田町教委 1997)。丹生川との合流点には楯の花遺跡、臈気川との合流点には浄願寺裏遺跡が位置しており、これ等の遺跡は最上川に沿った物流の中継地として機能すると共に、各支流を遡った遺跡と相互補完の関係を有していたと推定される。

なお、尾花沢盆地では、製塩土器の底部が基幹集落である漆坊遺跡と宮の前遺跡で出土している(図 9)。両例とも尖底の形状の特徴から、大洞 A1 式に位置づけられる(図 10)。松島湾等の太平洋沿岸域から江合川水系

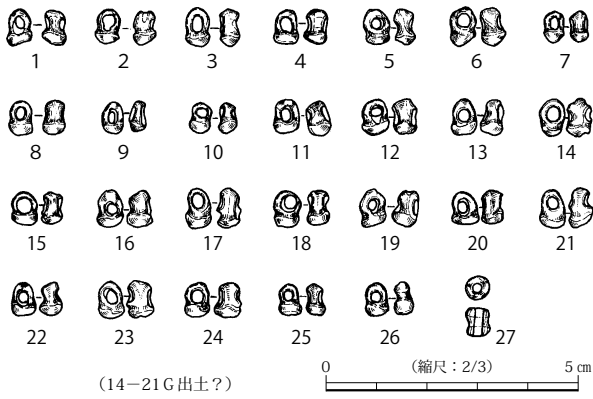


図8 山形県尾花沢市漆坊遺跡出土の瓢箪形の土製赤彩小玉

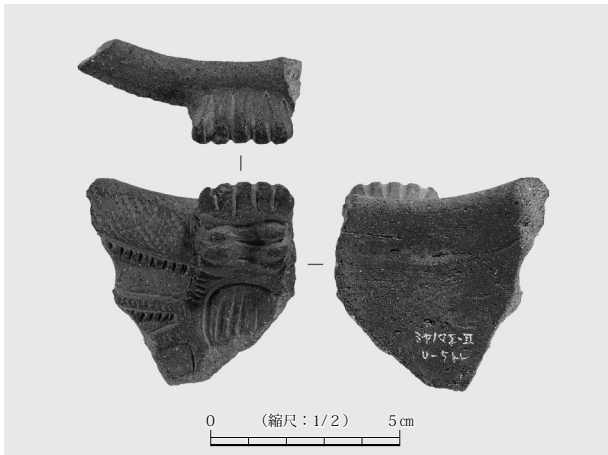


写真1 宮の前遺跡出土の安行2式土器

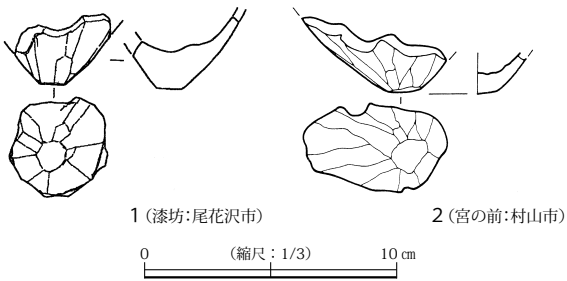


図9 尾花沢盆地出土の製塩土器

の堺田越または鳴瀬川水系の鍋越峠（標高 520 m）等を経由して、製塩土器に伴って塩や塩蔵品が運ばれてきたと推定され、晩期の遠隔地交流を示した事例として特筆される。また、後期末葉の事例となるが、宮の前遺跡からは最北限となる関東地方の安行2式の注口土器片（搬入品）が出土している（写真1）。尾花沢盆地は今日豪雪地帯として知られているが、縄文時代においては頁岩等の実用材を産出し、森林・河川生態系の資源に恵まれた求心力を持った有力な地域圏が形成されていたと推定される。

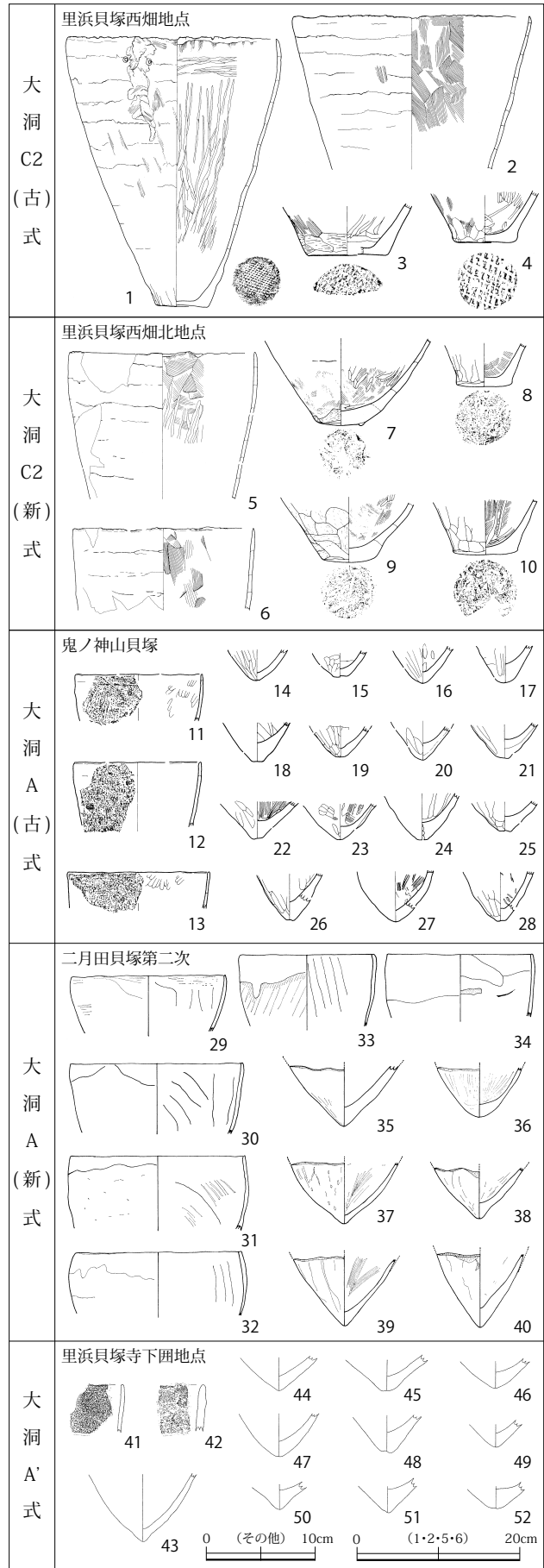


図10 松島湾出土の製塩土器

## 5 宮城県北西部の晩期遺跡の様相

図 11 は向町盆地の東側に当たる宮城県北西部の地図である。宮城県内では松島湾と並んで晩期遺跡の密度が高い地域となっており、図郭内（面積：864 km<sup>2</sup>）には 172 遺跡がプロットされている。遺跡密度で見ると、山形県北東部の図 5 が 0.07 遺跡 / km<sup>2</sup> であるのに対し、宮城県北西部は 0.2 遺跡 / km<sup>2</sup> となり、宮城県全体（0.08 遺跡 / km<sup>2</sup>）に比べても非常に高い密度を示している。なお図 5 と図 11 の図郭間は東西幅 11.5 km を測り、宮城県側に 20 遺跡が存している（図 3）。この区域には、黒曜石を産出する鳴瀬川水系の加美郡加美町（旧宮崎町）湯の倉地内が含まれる（図 4）。

### （1）宮城県北西部の晩期遺跡

向町盆地東端の堺田越を過ぎると、宮城県北西部の江合川水系の大谷川に至る。宮城県北西部には、大崎平野北部に「築館丘陵」、江合川西岸に「玉造丘陵」、鳴瀬川南岸に「加美丘陵」とそれに続く「大松沢丘陵」が展開する。鳴瀬川以北の丘陵には栗駒地域のカルデラ火山の影響で火山砕屑物が厚く堆積しており、北から順に三迫川・二迫川・一迫川・江合川・鳴瀬川が南東～東方向に流下し、それ等の流路に沿って河岸平野が形成されると共にその支流による開析谷が樹枝状に発達する。築館丘陵と玉造丘陵は二迫川・一迫川・江合川沿岸の各平野によって更に 4 分され、北東から南西へ岩ヶ崎丘陵、鶯沢丘陵、清滝丘陵、青木原台地に区分されている（宮城県企画部編 1991：15 頁）。特に清滝丘陵は旧石器遺跡捏造事件の舞台で、座散乱木遺跡、馬場壇 A 遺跡、上高森遺跡等が位置するため、テフクロロジー研究が蓄積されている（岡村ほか 1985）。なお前二者は晩期の周知遺跡でもあり、図 11 に遺跡位置がプロットされている。

**江合川・鳴瀬川流域** 大崎平野を貫流する主要河川を遡ると、江合川左岸の段丘には大洞 BC～A' 式主体の根岸遺跡（宮城県教委 1981）、鳴瀬川流域の加美丘陵末端の台地上には大洞 C2～A 式主体の香ノ木遺跡（宮城県教委 1985）が有力遺跡として位置している（図 11）。いずれも盛土遺構が形成されていたことが指摘されており（八木 2004）、該域の基幹集落とみられている。根岸遺跡の南東方約 3 km の天王寺遺跡では、嘗ての圃場

整備で後期末から晩期中葉の土器（大洞 BC～C2 式主体）が多数出土しており、近接した両遺跡は並存の関係にあった（藤沼・秋山編 2007）。

江合川は清滝丘陵と青木原台地の間を最大 2 km 幅の氾濫原を形成して流下するが、兩岸の段丘から丘陵部には、晩期の小規模遺跡が密集している。北小松遺跡が位置する下流域の低地帯とは異なった森林域における季節的な生業活動が活発に営まれていた様相を窺わせるものであろう。なお清滝丘陵末端に位置する塚原 A 遺跡では緑色石英製の不定形の玉が 1 点採集されている（栗島編 2024：63 頁）。

**一迫川流域** 石巻平野を流下する迫川（一迫川）を遡った山王圀遺跡は晩期後半期（大洞 C2 式～山王Ⅲ層式期）に規模を拡大した。一迫川支流の長崎川北岸の比高差 3 m 程度の自然堤防上に立地し、1965 年の東北大学による遺跡北側東寄りの調査が著名である（伊東・須藤 1985）。遺跡北側の後背湿地の広い範囲（東西 140 m、南北 100 m）に厚い泥炭層が形成されており、その層位的出土状況は東北中部の晩期後半～弥生中期初頭における編年研究の指標になっている（図 15）。山王圀遺跡の周囲には祇園・鶴町 A・小畑前・金矢遺跡等の小規模遺跡が点在しており、同遺跡が該域の基幹集落となって展開していたと推定される。

更に一迫川の 6 km 上流には大洞 BC～A' 式主体の巻堀遺跡（宮城県教育庁編 1977）が位置しており、晩期後半には山王圀遺跡と並存の関係にあった。両遺跡の間には弥生時代前期末「青木畑式」（図 17）の標準遺跡である青木畑遺跡（宮城県教委 1982）が位置している。

**大崎平野西部** 大崎平野北縁の清滝丘陵末端から平野部にかけての区域には、北小松遺跡が位置している。周囲の諏訪・愛宕山・宮沼遺跡を含め後期後葉～弥生前期にかけて大規模な低湿地性の遺跡群を構成しており、特に大洞 A～A' 式期が卓越する。また鳴瀬川左岸の自然堤防上には大洞 C2 新～A 式主体の矢根八幡遺跡（大崎市教委 2015）が位置している。北小松遺跡西方のいもり塚周辺遺跡（2・3 区）<sup>（註 5）</sup> と宮沢遺跡（宮城県教委 1980）、東方の通木田中前遺跡（大崎市教委 2021a）でも大洞 A～A' 式期の良好な資料が出土しており、晩期後葉の大崎平野の西部地域には、北小松遺跡を基幹とする有力な地域圏が形成されていたと推定される。向町

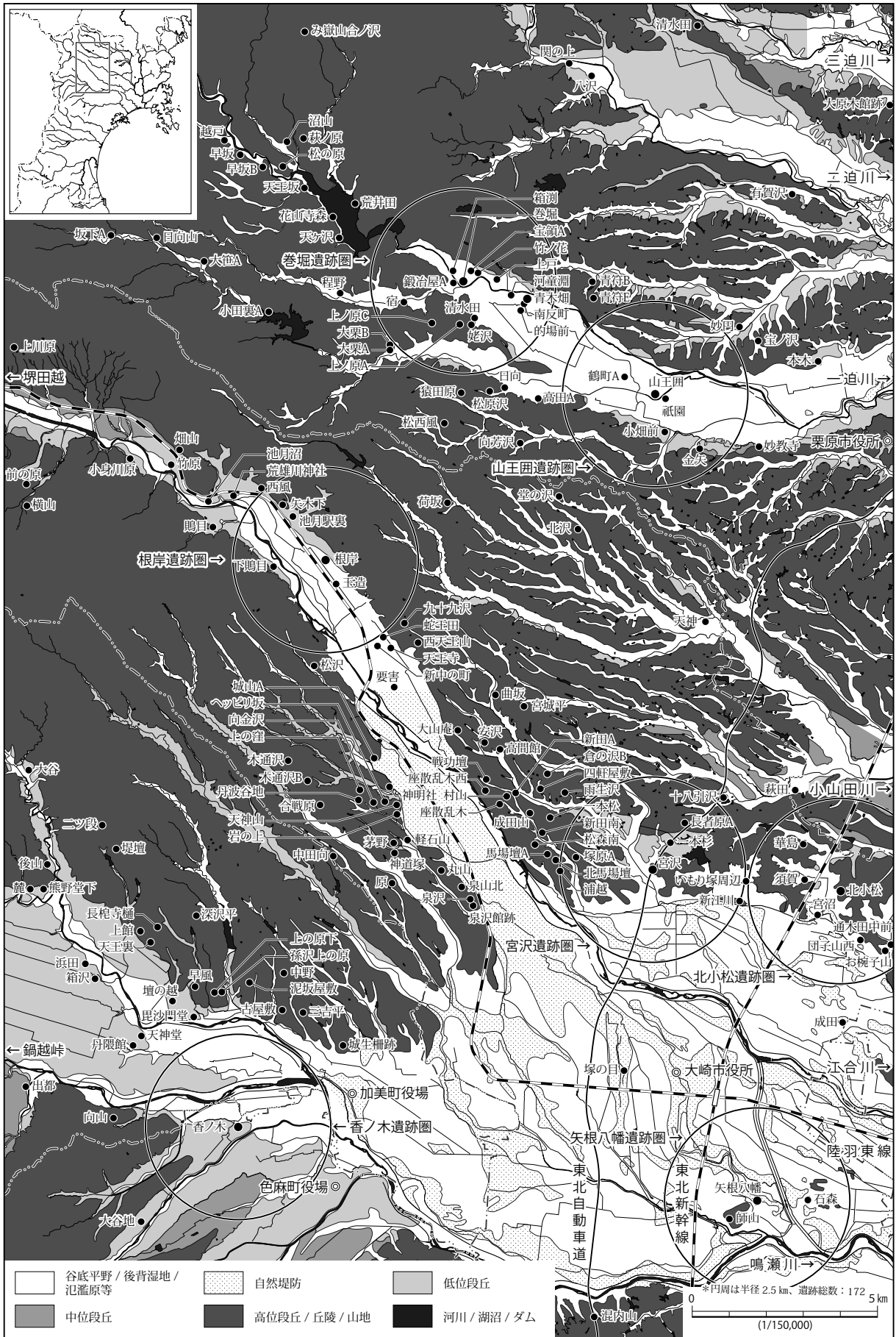


図 11 宮城県北西部の縄文時代晩期の遺跡分布図 (縮尺: 1/150,000)

盆地の材木遺跡は北小松遺跡の50 km圏内に位置し、江合川を通して連絡しており（図4）、何らかの関係を有していたと考えられる。

なお、大崎平野では弥生時代前期に大規模な洪水が発生しており、洪水堆積層の年代が弥生2a期（青木畑式期）と見積もられている（小野編2021:502－505頁）。洪水後はトチノキやクリの林が縮小し、低地部に沼地が形成され平安時代頃まで存続していたと推定されており、災害が従来の生活基盤に大きな変化をもたらしたことが指摘されている。

**その他の地域** 江合川（荒雄川）を更に遡ると、鳴子ダム（荒雄湖）を経て鬼首盆地（鬼首カルデラ）に至る。カルデラ自体は直径13 kmを測るが、盆地はカルデラ中央部の荒雄岳（標高984 m）の山裾を荒雄川に沿ってC字状に取り囲んだ三日月形を呈し、晩期の遺跡は3遺跡（鬼切部館跡・原遺跡・川東遺跡）が周知されている。図4に図示した県境の花立峠（標高796 m）は、向町盆地の絹出川支流の黒沢川と鬼首盆地内の<sup>かむろ</sup>禿高原とを結ぶ峠であり、急峻な区間は約3 kmで、今日においても両盆地をつなぐ最短ルートとして機能している。縄文時代においても連絡路として使用されていたと推定され、鬼首盆地内では大洞A式主体の<sup>かわひがし</sup>川東遺跡で緑色石英の剥片が確認されている。

宮城県北西部の江合川流域は向町盆地と縄文時代を通して相互の往来が活発であったと推定され、根岸遺跡と北小松遺跡の緑色石英製玉類の出土はその背景を物語っているように思われる。中山平盆地と鳴子盆地の境界に位置する全長約3 kmの「鳴子峡」（大谷川）は最終氷期以降の下刻作用で形成されたため、縄文時代における影響の度合いは判然としない。しかし鳴子峡左岸の崖上には比較的傾斜の緩い段丘面が広がっており、大きな障壁にはならなかったと推察される。

## （2）宮城県北西部の「伏鉢墓」

宮城県北西部の大洞A式期には、遺体に逆位の鉢形土器を被せた特徴的な土坑墓が、北小松遺跡（大崎市）、根岸遺跡（大崎市）、<sup>すりはぎ</sup>摺萩遺跡（大和町）の3遺跡で検出されている（図12・13）。

**北小松遺跡** 北小松遺跡では2009年に調査されたC丘陵南斜面（D区）で、4基の伏鉢墓が検出されている（宮城県教委2014）。C丘陵突端部付近の南斜面は遺物

包含層（VI層）が広がっており、このVI層の堆積により丘陵裾部に微高地が形成され、ここに墓域（土坑墓27基、埋葬犬骨2基等）が構築されていた。図12に示した4基の伏鉢墓はD-56・57区の直径5～6 mの範囲に、重複しないで頭位を北東方向に向けて検出された。その他に図12では、調査区末端で確認されたSK49・51・52も伏鉢墓の可能性が高く、また図郭外となるが、SK53の東方約10 mのSK77（D-57区）と南東方約7 mのSK67（D-74区）でも、鉢を伏せた土坑墓が検出されている（土器は取り上げていない）。従ってD区では9基の伏鉢墓が確認されたことになる。

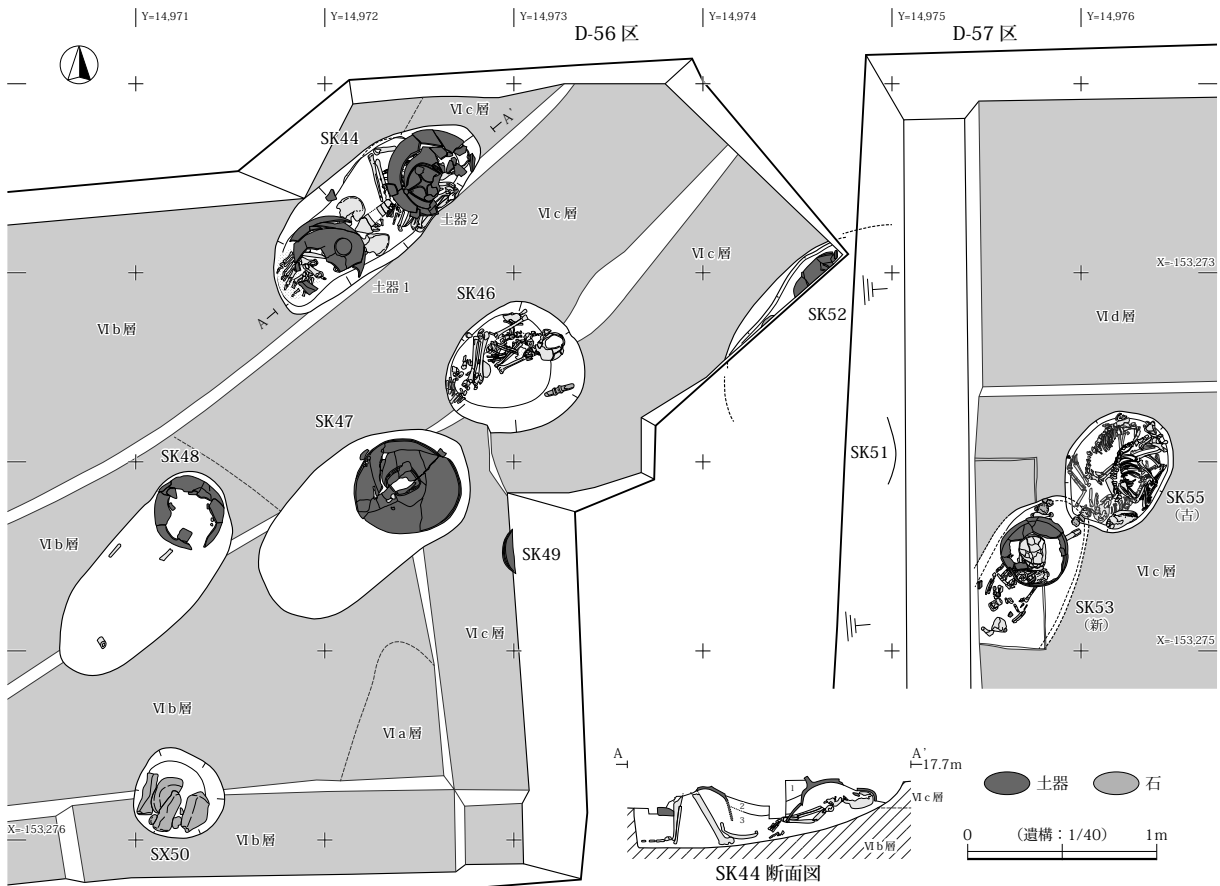
**SK44** は133 cm×55 cmの楕円形で、残存する深さは32 cmを測る。底面は平坦で、頭部側が緩やかに立ち上がるのに対し、脚部側は急に立ち上がる。頭部を北東に埋置した仰臥屈葬位の人骨が良好な状態で遺存しており、頭部から胸部にかけて四脚付鉢形土器（2）、脚部に平縁の鉢形土器（1）が伏せた状態で埋設されていた。人骨は成年～熟年の男性で、胸部付近と足先には赤色顔料が散布されており、人骨の放射性炭素年代は2,504 ± 23calBPと計測されている。1・2の外面には赤彩がみられる。

**SK47** は128 cm×67 cmの楕円形で、残存する深さは26 cmを測る。遺構確認のみで埋葬骨は未確認であるが、土坑の北東に波状の口部装飾帯を持った四脚付鉢形土器（3）が埋設されていた。3の外面には赤彩がみられる。

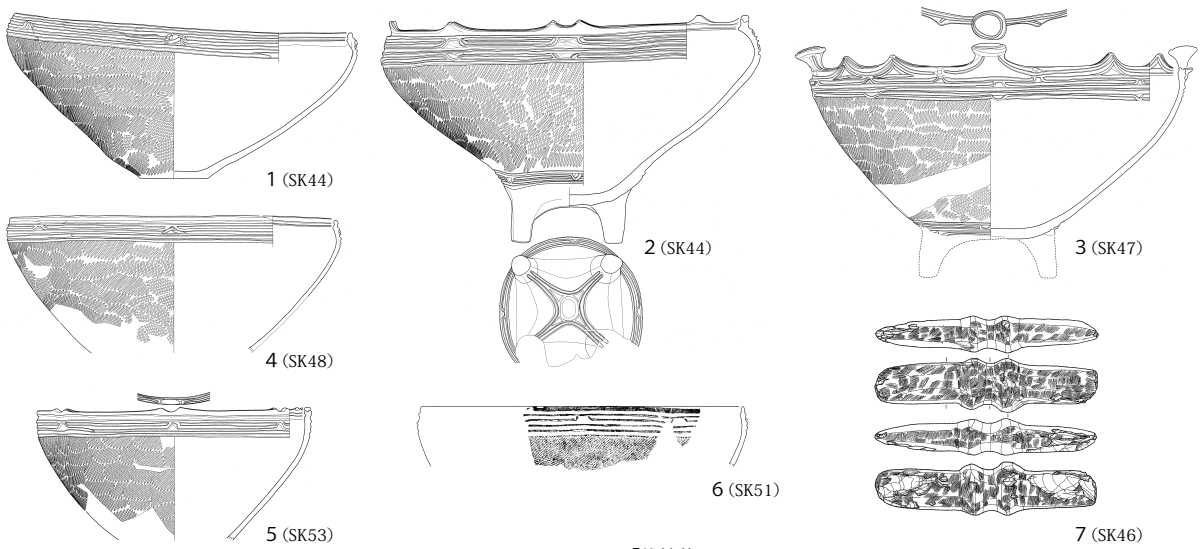
**SK48** は125 cm×55 cmの楕円形で、残存する深さは17 cmを測る。遺構確認のみであるが、大腿骨とみられる埋葬骨が検出され、仰臥屈葬位と推定されている。平縁の鉢形土器（4）が北東に伏せた状態で埋設されていた。4の外面には赤彩がみられる。

**SK53** は91 cm以上×53 cm以上の楕円形で、残存する深さは20 cmを測る。仰臥屈葬位の男性の可能性のある未成人骨で、2個一対の山形突起を7単位配した鉢形土器（5）が、頭部から胸部にかけて伏せた状態で埋設されていた。人骨の放射性炭素年代は2,045 ± 21calBPと測定され、弥生中期後半に相当する新しい年代値となっており、土器型式との整合性は得られていない。なお5の外面には赤彩がみられない。

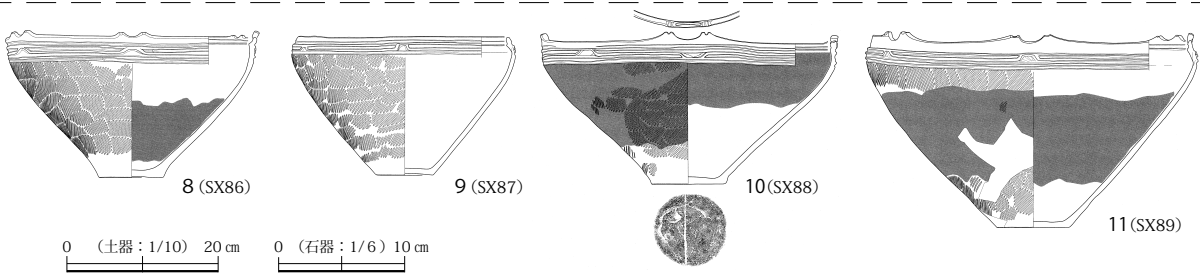
伏鉢墓以外では、土坑墓SK46は75×66 cmの円形で、仰臥屈葬位の未成人骨が検出された。完形（幅17.6 cm）



D-56・57区の遺構配置図

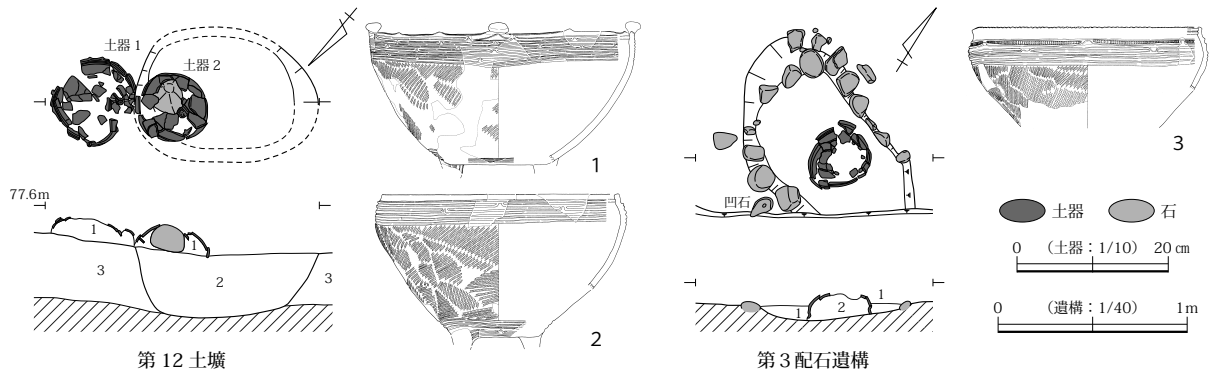


D-56・57区の「伏鉢墓」

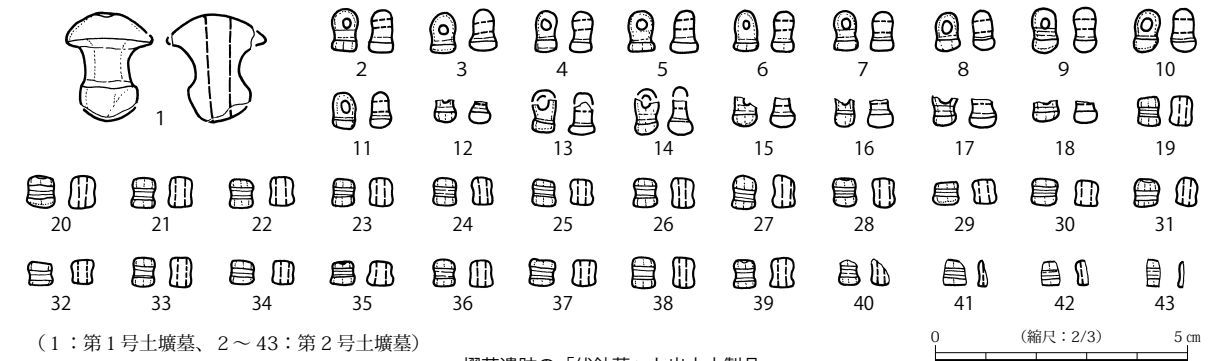
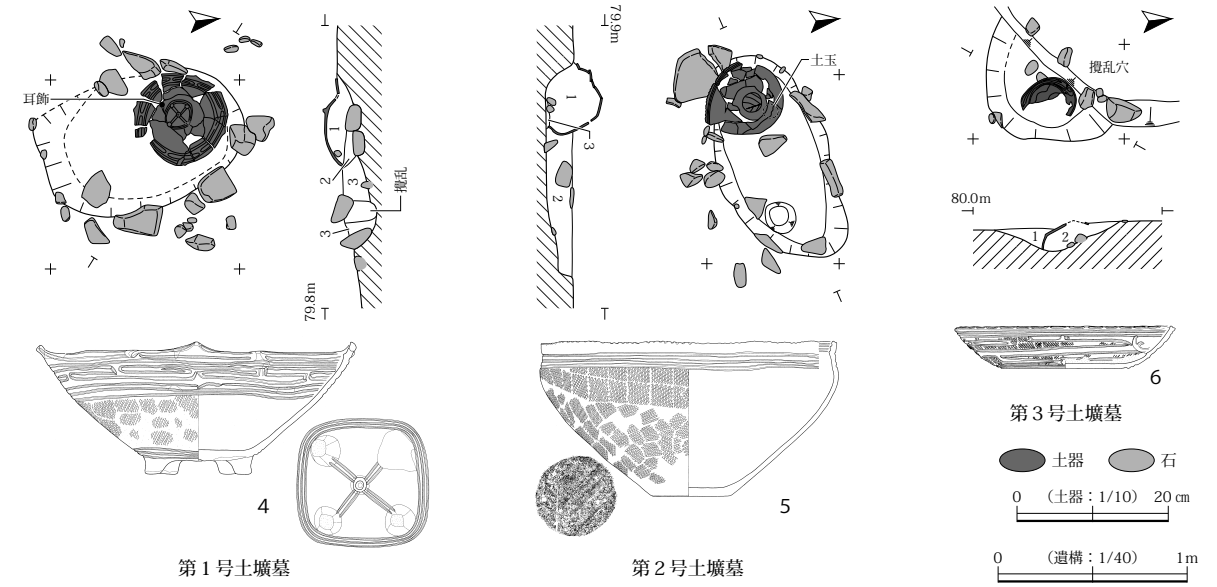


D-58区の「倒置埋設土器」

図12 宮城県大崎市北小松遺跡C丘陵南斜面(東側)の「伏鉢墓」



根岸遺跡の「伏鉢墓」



(1：第1号土坑墓、2～43：第2号土坑墓)

摺萩遺跡の「伏鉢墓」と出土土製品

図13 宮城県大崎市根岸遺跡・大和町摺萩遺跡の「伏鉢墓」

の独鈷石(7)<sup>(註6)</sup>が副葬され、右手首付近に赤色顔料が残存しており、人骨の放射性炭素年代は2,320±22calBPと計測されている。伏鉢墓SK53に切られた土坑墓SK55は67cm×53cmの楕円形で、犬3体がほぼ同時に埋葬されていた。集石遺構SX50は直径50cmの円形の土坑で、石皿3点と磨石1点が埋納されていた。

その他に丘陵南斜面の伏鉢墓群から北西方に100m弱離れたD-58区では、鉢形土器を伏せた状態で埋設

した土坑5基(SX85は検出状況のみ記録)が、1～1.6m間隔で弧状に配列された状態で検出された(図12-8～11)。鉢形土器の口径を上回る規模の掘方を持った土坑に匹字文を施した大型の鉢形土器が埋設されていたが、10(SX88)の土器内部の堆積土から人骨(臼歯歯冠部、指骨(手)末節骨)が出土したことから、埋葬に関連した遺構と考えられる。土器は伏鉢墓と同様の特徴を持つが、器面には炭化物が広範囲に付着する(8・9

は内面のみ)。一方外面の赤彩や四脚付が認められないといった差異も指摘される。土器付着物の放射性炭素年代は、10 が 2,456 ± 23calBP、11 が 2,439 ± 22calBP と近似した年代値を示しており、SK44 の人骨の年代ともそれ程乖離していない。埋葬に関連したとすれば、胎児・新生児～幼児の埋葬または成人等の二次葬であつた可能性が考えられ、煮炊きに使用された土器が副葬されたことになる。

**根岸遺跡** 根岸遺跡では 1980 年の調査で、北区南側から伏鉢墓 2 基 (図 13 上段) が検出されている。この付近は大洞 BC～A' 式が混在した遺物包含層 (第ⅥA層) が形成されており、配石遺構・土壙・埋設土器・石囲炉・フラスコ状ピット・焼面・ピット群の遺構が検出されたが、北区の中央部から南区にかけて大洞 C1 式前後と同 A・A' 式の二期にわたって墓域が構築されていた (宮城県教委 1981)。

**第 12 土壙** はⅥA層中で確認された推定 100 cm×70 cm の楕円形で、同層を掘り込んで構築されていた。深さは 35 cm を測り、底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がる。堆積土は炭化物と砂を含む黒色土の単層で、白玉 15 点、土製小玉 2 点、サメ歯 1 点が出土した。堆積土上面 (2) と土坑に接する外側 (1) に、四脚付の鉢形土器 2 点が接するように伏せられて布置されていた。1 は遺構外となるが、墓に同時に納められたことは確実で、いずれも外面に赤彩の痕跡を留めていた。なお 2 の内側には 20 cm 大の河原石が埋納されており、遺構内から出土した土製小玉の内 1 点は瓢箪形赤彩小玉 (相原ほ

か 2021: 口絵 2) で、白玉は総て緑色凝灰岩製であつた (相原・飯塚 2020: 51 頁)。

**第 3 配石遺構** はⅥA層上面で確認されたが、東端がトレンチで削平されたため長軸は不明で、短軸 60 cm の楕円形と推定されている。土坑の周辺と内壁に 10～20 cm 大の配石を伴い、深さは約 10 cm で、底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。堆積土は小石を含む黒色土の単層で、土坑のほぼ中央に底面に接して底部を欠損した鉢形土器 (3) が伏せた状態で埋設されていた。なお 3 の外面には赤彩がみられない。

また**第 2 配石遺構** (図 14 左側) では、土坑中央の底面の約 8 cm 上位から逆位の状態で土器が検出され、底面から 9 点の白玉 (緑色凝灰岩製) がまとまった状態で出土した。土坑は径 50 cm 程度の円形で、土坑周縁となる約 60 cm の範囲に 10～20 cm 大の河原石が上端ラインに沿って配置されていた。埋設された土器の内容は不明であるが、玉類の出土から埋葬遺構で、伏鉢墓であつた可能性が考えられる。東側に 30 cm 離れた第 1 配石遺構 (図 14 右側) でも赤彩された土製小玉 1 点が出土しており、配石墓 (規模: 110 cm×60 cm) とみることができる。

**摺鉢遺跡** 摺鉢遺跡では、1981 年に調査された東地区東端の第 1 遺物包含層と第 4 遺物包含層間の東西 20 m×南北 15 m の範囲に、土坑墓 3 基と埋設土器 9 基からなる墓域が構築されていたが、そのうち埋設土器 4 基が第 4 遺物包含層の範囲に含まれる (宮城県教委 1990)。同包含層は調査区東端の緩斜面に形成された東西約 21 m、南北約 12 m、面積約 180 m<sup>2</sup> の小規模な捨て場跡で、後期末～大洞 BC 式期の遺物が含まれており、前記した埋葬遺構は包含層の上面で検出された。土坑墓 3 基は図 13 下段に示したが、浅鉢・鉢形土器が逆位の状態で埋設され、3～4 m の間隔で並列して調査区東端の地山面で検出された。

**第 1 号土壙墓** は最南端に位置し、形状は 110 cm×70 cm の楕円形で、確認面からの深さは 15 cm を測る。土坑の周囲に扁平な石が配されるが、規則的とは認めがたい。土坑の主軸方向は南-北軸にあり、北側に山形突起を 4 単位配した四脚付鉢形土器 (4) が伏せて埋設されていた。土坑の底面は北から南に傾斜しており、伏鉢直下の底面に扁平な石が 2 個配

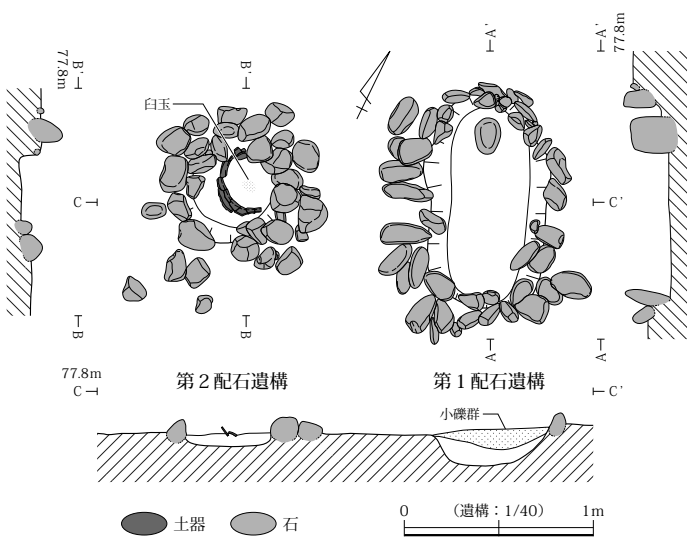


図 14 宮城県大崎市根岸遺跡の配石墓

置され、その間からキノコ形耳栓（図 13 下段 1）が出土した。また偏平な石の直上の狭い範囲に多量の炭化物が堆積していた。

第 2 号土壙墓は中間に位置し、形状は 115 cm × 70 cm の楕円形で、確認面からの深さは 14 cm を測る。土坑の外周に大きな石が据えられていたが、規則的とは認めがたい。土坑の主軸方向は東—西軸にあり、西側に口端が小波状縁の平底の鉢形土器（5）が伏せて埋設されていた。土器は北・東側では土坑の底面、南・西側では外壁に沿った配石に接しており、斜位に埋設されていた。底面は平坦であるが、東側が西側より数 cm 高く、土器直下で底面より 3 cm 上位で積載された土製小玉が 42 点以上が出土した（図 13 下段 2～43）。

第 3 号土壙墓は北端に位置し、攪乱穴によって北側の大半が失われており、平面形や規模の詳細は不明である。土坑の南端に体部の文様が 2 単位の磨消文様（平行線化した雲形文）で構成された口径 29 cm の大型の浅鉢形土器（6）が、土坑底面より数 cm 上位に斜位に埋設されていた。

**宮城県北西部の土器型式** 伏鉢墓には有文の鉢形土器が用いられていた。鉢形土器は器高が口径と同等（1/1）から半分（1/2）までの器種が相当するが、その初期には器高が低く底径の大きい浅鉢形土器（摺萩遺跡第 3 土壙墓）も使用されていた。

宮城県北西部の晩期後葉から弥生時代中期初頭の編年の指標になるのは、1965 年に東北大学によって発掘調査された山王圀遺跡の層位的成果である（伊東・須藤 1985）。その出土状況を一覧にしたのが図 15 で、各型式の概要を記すと以下の通りである。

**大洞 C2 式** は山王圀遺跡西区 VII b 層出土土器群が基準となる（図 15 - 82～94）。器種は深鉢、多様な鉢、台付鉢、浅鉢、皿、壺で構成され、稀に香炉形土器、蓋が見られる。深鉢・鉢の口縁は外屈・外反し、小波状口縁となる。その頸部に、平行沈線・刻み目、「溝底の刺痕」が施される。鉢、浅鉢の装飾要素では、平行線化の道程にある磨消縄文の文様が頻繁に用いられる。新古に 2 細分されるが、同新式は合体型ネガ文様（85・86・88・89・92）が出現し発展を遂げるが、工字文のプロトタイプも成立しており、頸胴部界の眼鏡状隆帯（86）や口縁部の A 突起が増加する。

**大洞 A 式** は山王圀遺跡 V・VI 層出土土器が基準となるが、下位の VI 層出土土器（図 15 - 72～81）が古相の大洞 A1 式、上位の V 層出土土器（50～71）が新相の同 A2 式に該当する。VI 層出土土器は幅広の工字文を主体とし、V 層出土土器は幅の狭い隆帯による流水状の工字文や入り組んだ匹字文（64・65）を主要な装飾要素とする。更に上位の V a・k 層では匹字文や間隔の狭い平行線に 2 個一対の粘土粒を貼付した工字文（53～56）が主体となる。V c-7 層から出土した浮線渦巻文の大口壺（68）は、蓋形土器とセット関係にあり、広域的な分布が推定されている（須藤編 2007）。なお参考資料として、図 16 に仙台平野の大洞 A2 式の指標となる赤生津遺跡（仙台市泉区）の包含層地区出土土器を提示した。山形県では砂子田遺跡（天童市）が並行関係にあり（山形県埋文セン 2003a）、今回調査された材木遺跡の主体も当該型式にある。

**大洞 A' 式** は晩期最終末に相当し、山王圀遺跡 IV l・m 層出土土器（図 15 - 36～49）が基準となる。器種は深鉢、鉢、台付鉢、浅鉢、高坏、壺によって構成され、特に大型の高坏（45・46）が発達する。高坏・鉢等の装飾は文様帯の幅が比較的狭く、変形工字文（45・49）や匹字文（37・44）などが展開する。浅鉢は口縁部が内湾した器形で、口縁部に丁寧に彫り込まれた匹字文が 1～2 段展開する（40・41・43）。深鉢は小波状口縁、山形突起を持ち、口頸部が屈曲して立ち上がる（36）。

**山王 IV 上層式** は弥生時代の最初頭に相当し、山王圀遺跡 IV a・k 層出土土器（図 15 - 20～35）が基準となる。東北北部に分布する砂沢式に共通する器形、装飾、意匠体系、製作技法が認められ、弥生前期に位置づけられている（須藤編 2007：43 頁）。器種は深鉢、鉢、浅鉢、高坏、壺で構成され、平縁甕（21）と粗製蓋が僅かに共伴する。深鉢は小波状口縁、山形突起を持ち、口頸部が屈曲して立ち上がる先行型式からの伝統的形態が主体である。山形県では生石<sup>おいし</sup>2 遺跡（酒田市）が並行関係にあり、同遺跡には遠賀川系壺が認められる（山形県教委 1987）。

**山王 III 層式** は山王圀遺跡低湿地包含層の III 層出土資料が基準となる（図 15 - 1～19）。III 層は 7 枚の包含層（III a・b・c・2・k・l・m 層）に細分され、上・中・下層に区分されるが、図示した「III c-2 層」はその内の中層に

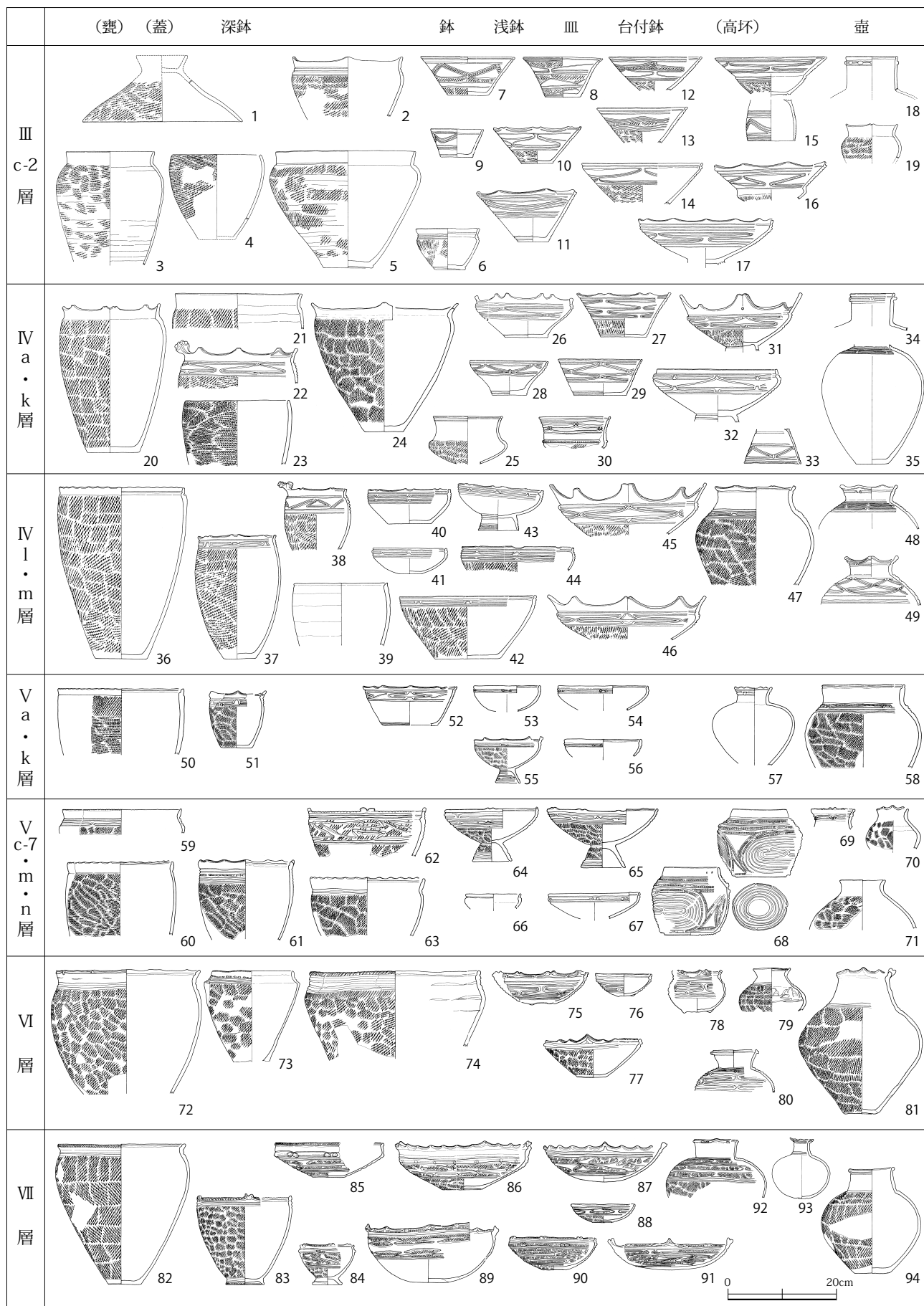


図 15 宮城県栗原市山王冨遺跡層位別土器組成 (伊東・須藤 1985) 改変

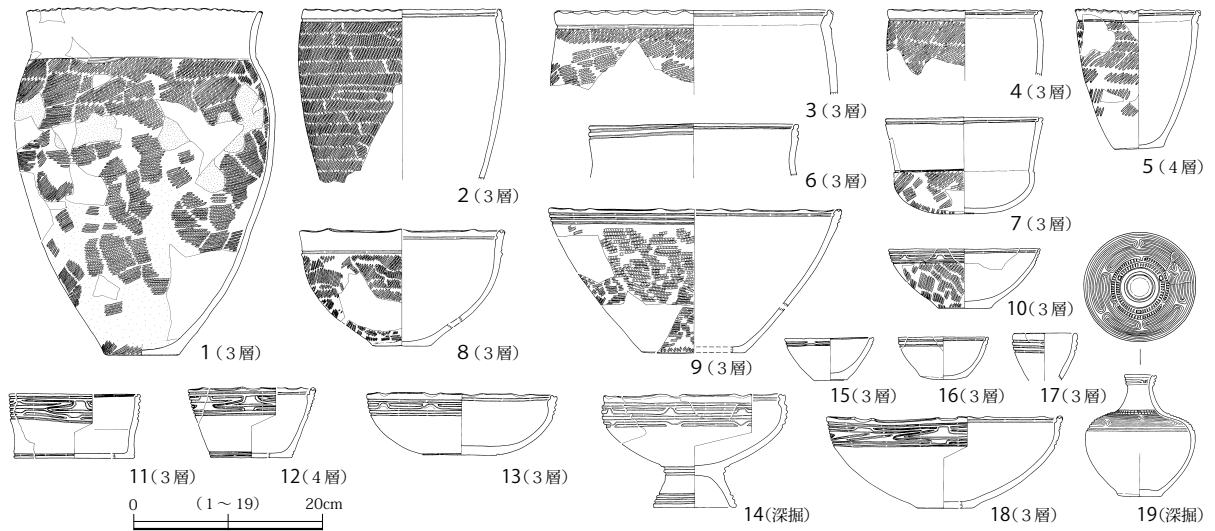


図 16 宮城県仙台市泉区赤生津遺跡出土の大洞 A2 式土器

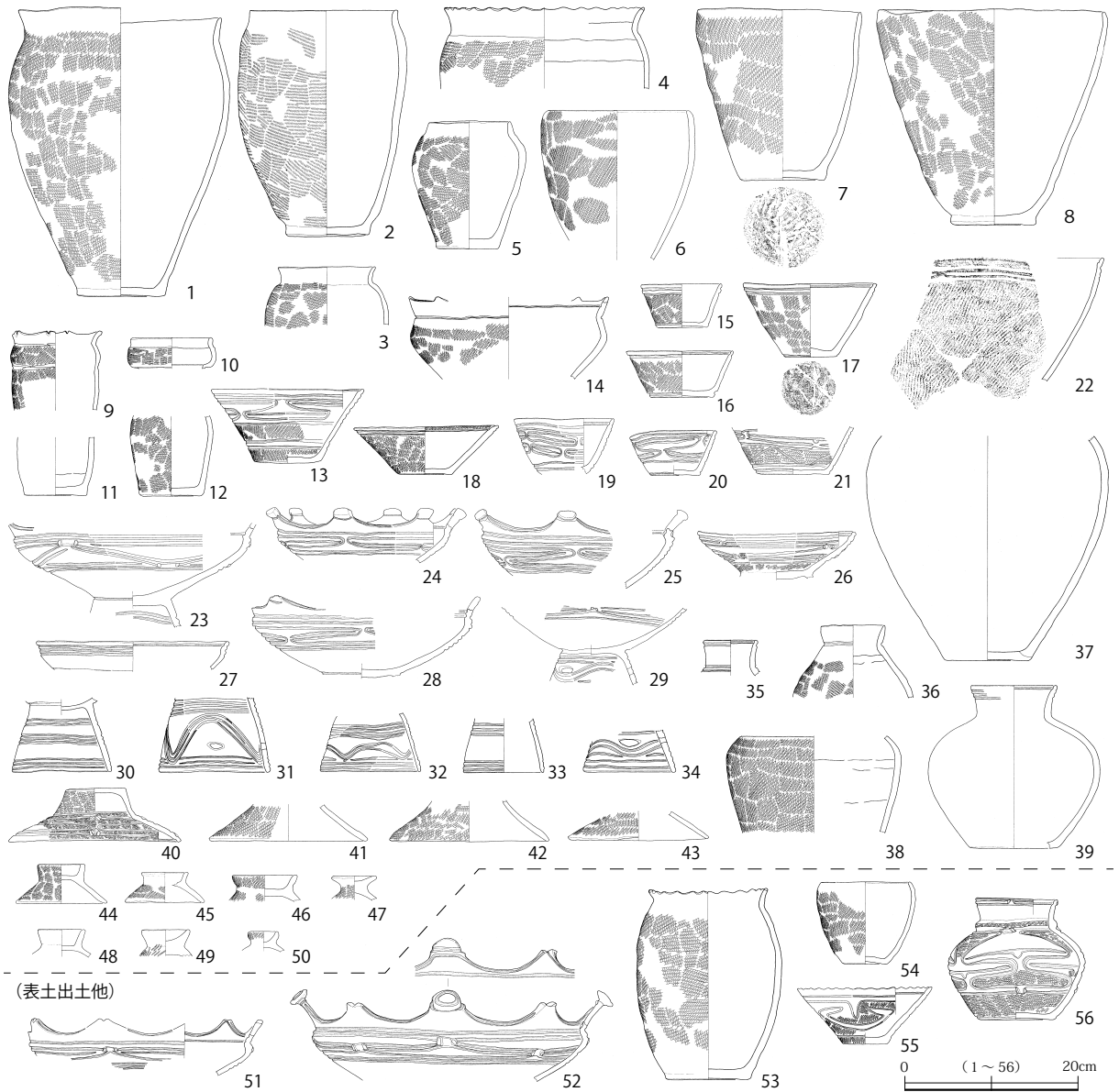


図 17 宮城県栗原市青木畑遺跡出土の弥生時代前期の土器（青木畑式）

該当する。器種は甕、蓋、深鉢、鉢、浅鉢、高坏、壺、小型蓋、瓢形土器などで構成される。甕は平坦で直上、或いは緩やかに外彎する口縁を持つ。頸部で外折し、体部は上位に最大径を持つ倒卵形である。同式を提唱した須藤隆氏は弥生時代前期後葉に位置づけたが、北上盆地の「谷起島式」、宮城県南部の「鱸沼式」が並行関係にあり、今日の見解では同中期初頭の編年の位置が妥当と思われる。

当該域では、山王Ⅳ上層式と山王Ⅲ層式の間で青木畑式が位置づけられている(図17)。青木畑遺跡は山王Ⅳ遺跡から北西方約4.5kmに位置しており、1972年調査の出土土器(宮城県教委1982)等を基に、弥生時代前期末として青木畑式が設定された。器種は甕、蓋、深鉢、鉢、浅鉢、高坏、壺などで構成される<sup>(註7)</sup>。同式は甕と蓋の定着、高坏の盛行、「C-1型変形工字文」(流水型)の盛行と磨消縄文手法の未発達を特徴として、山王Ⅲ層式以前に位置づけられたが、山王Ⅳ遺跡では当該型式の層準は確認されておらず、型式学的に導出された土器型式となっている。高坏は口縁部突起の発達と脚部の大型化が顕著で、後者には波状文が1~2段巡らされる(31・32・34)。また笠形の蓋が安定して組成する(40~50)。

**「伏鉢墓」の土器型式** 伏鉢墓の鉢形土器の土器型式は上記の大洞C2~A'式が該当するが、特に口頸部の狭い文様帯に匹字文を施した例が卓越しており、大洞A2式前後に盛行した葬法と考えられる。鉢形土器は口径30cm超の大型品が用いられ、中には50cmに近い超大型品(図12-2・3)も存しており、四足の脚部付や外面に赤彩の痕跡が多く認められる。

北小松遺跡の伏鉢墓の鉢形土器(図12-1~6)は、口頸部が強く内湾し口縁端部が短く外折した器形で、口内に明確な段が作出され、その直上に沈線が巡らされる。平縁の他に、2個一組の山形突起(2・5)や先端が円盤状となる装飾突起(3)、口上端に溝を巡らせた例(2・3・5)、口内側溝から枝を加えた例(3)が存する。匹字文は隆線手法を基本とし、上下対向の匹字文(2・3)、一段の匹字文(1・4~6)、上下交互の匹字文(10)で構成され、大洞A2式への位置づけが推定される。しかし横幅が狭まった匹字文は大洞A'式にも多用されており、波頂部先端に円盤状の装飾

を持った例は、大洞A'式~青木畑式の高坏(図17-24・25・52)に多くみられる。波状縁の口上端の溝も大洞A'式(図15-37・38・40・43~45・47・49)に顕著で、山王Ⅳ上層式(22・27)と山王Ⅲ層式(11・16・17)にも認められる。上記から北小松遺跡例には大洞A'式に近似した様相が指摘され、大洞A2式でも新しい段階に相当すると考えられる。

根岸遺跡の伏鉢墓の鉢形土器(図13-1~3)は、口頸部が強く内湾し口縁端部が緩く外折し直上した器形(2・3)で、口内に段が作出され、その直上に沈線が巡らされ、1・2は四脚付となる。1は口頸部が内傾せず直上した器形で、口縁部には先端に円盤状の装飾を付けた突起と山形突起が配される。口部装飾帯と頸部文様帯が融合し、装飾突起直下には三角形区画が作出される。頸部文様帯は横幅の狭まった4段の匹字文で構成される。2は平縁で2段の匹字文で構成され、1と同時期と考えられる。3は小波状口縁で、頸部文様帯は交互に対向した匹字文で構成されるが、上端の沈線内は刺突で充填される。この刺突列は大洞C2式に盛行した頸部文様帯の「溝底の刺痕」の名残を留めており、山王Ⅳ遺跡では大洞A2式の層準(V層)に認められる(図15-58・61・68)。本例も同式に相当すると考えられ、口内には2条の沈線が巡らされる。

摺萩遺跡の伏鉢墓の鉢形土器(図13-4~6)は、「大洞C2~A式移行期」に位置づけられている(相原ほか2021:32頁)。4は胴部から口縁部にかけて直線的に外傾し、底部は四脚付となる。口縁部には4単位の山形突起と小突起が配され、口上端と外面の突起間に沈線が施され、口内にも平行沈線が巡らされ、山形突起下は三角状の陰刻となる。口部装飾帯と頸部文様帯は沈線で明確に区分され、頸部文様帯には沈線による流水状の工字文が展開するが、沈線描出は余り丁寧でない。工字文のプロタイプとみることができ、大洞C2~A式移行期に該当する。5は胴部上端が内湾し、口縁端部が直上した器形である。小波状口縁で口縁部外面は無文となり、口内に段が作出されその直上に平行沈線、頸部文様帯に3条の沈線が巡らされる。4と同じく大洞C2~A式移行期に位置づけられるであろう。6は最古の事例となる大洞C2式の低平で浅鉢形土器である。底径の大きな底部から体部下端にかけて丸味を持って立ち上がり、口縁

部にかけては直線的に外傾し、口上端に短沈線で小波状縁が作出される。体部文様が独立並置型のネガ文様（高橋 1993）で構成されるが、平行線化が進行している。また内面下部には縄文帯の系譜を引く段が巡らされ古い様相を留めるものの、低平化が進んでおり、大洞 C2 式新段階への位置づけが妥当と思われる<sup>(註8)</sup>。

**小 結** 土坑墓に逆位の鉢形土器を被せた葬制としては共通するものの、細部においては遺跡毎に差異が存する。北小松遺跡では人骨が遺存したが、二次葬の存在を窺わせる痕跡は確認できない。年齢別でみると成人だけでなく未成人も埋葬されており、性差については事例に乏しく速断を避けなければならない。また根岸遺跡や摺萩遺跡では土坑墓の周縁に石を配し、玉類などの装身具を装着して埋葬されていた。土器型式では、摺萩遺跡が大洞 C2 新式～A1 式、根岸遺跡が大洞 A2 式、北小松遺跡が大洞 A2 式新段階に位置づけられる。

宮城県北西部に見られる頭や顔を鉢形土器で覆う葬送儀礼は、忌むべき死者の霊を封印する意味が込められていたと考えられる。しかし一部の死者のみが対象になっていた。遺体に伏せられた鉢形土器は口径 40 cm 前後の大型の優品で、土器自体は死者個人の帰属ではなく、その集団で共用された貴重品であったと推定される。炭化物付着の土器は煮炊きに使用されていたが、外面が赤彩された例が多く、埋葬儀礼を執り行う中で大切な土器が死者と共に墓に納められたと推定される。

伏鉢墓は時期や空間的拡がり極めて限定された埋葬様式として注視されるが、現時点では向町盆地を含む山形県側にそれ等に類似した遺構は確認できない。上竹野遺跡の再葬墓の合口土器棺の蓋に、鉢形土器が用いた事例が指摘されるに過ぎない（山形県埋文セン 2019）。宮城県の江合川水系と山形県の小国川水系は東西間での物流経路であったが、文化的な障壁が潜在していた可能性も否めないように思われる<sup>(註9)</sup>。

## 6 結 語

材木遺跡を中心にその周囲の晩期遺跡の様相を概観してきた。向山盆地は日本海側と太平洋側を結ぶ交通の要衝で、人と物資が流れる主要経路になっていた。晩期には中期の水木田遺跡のような突出した遺跡は存在せず、小国川北岸の支流毎に小規模ながらも有力遺跡が並存し

ており、各支流沿いに生活領域を形成し相補的な関係を有していたと推定される。緑色石英の鉱床は明確になっていないが、栗駒地域のカルデラ周辺と推定され、材木遺跡がその集積・加工地となって玉製品や原材料を周囲の遺跡に分配していたことが明確になった。緑色石英の玉類の製作は材木遺跡の主体的時期から大洞 C2～A 式期に盛行したとみられるが、それ以前の事例は秋田県<sup>むしな</sup>虫内 I 遺跡に指摘される（栗島編 2024：63 頁）。同遺跡では緑色石英製の小玉 1 点が確認されているが、瘤付土器第Ⅲ段階～大洞 BC 式主体の遺跡で、同 C1 式の土器が少量みられるものの、それ以降の土器は報告されていない（秋田県教委 1998）。このことから、緑色石英製品の流通が大洞 C1 式以前に遡る可能性が指摘される。

山形県の最上川水系は良質の頁岩の産出地として知られており、実用材の交換として向町盆地を通して宮城県側に運ばれたと推定される。日本海沿岸域の油田地帯に産出し、太平洋沿岸域の晩期（後期後葉以降）の骨角製ヤス類の固定などに多用された天然アスファルトも同様であろう。一方、向町盆地を含む最上地方の晩期遺跡からは、儀礼的製品である粘板岩製の石棒類が数多く出土する。粘板岩は北上山地南部が産出地となっており、三陸南部沿岸域には田柄貝塚（宮城県教委 1986）、大久保貝塚（宮城県教委 2019）、立浜貝塚（石巻市教委 2020）等の石棒・石刀の製作遺跡が存している。これ等の石製品が向町盆地を経由して山形県内陸部の晩期遺跡に流通したと考えられる。また、材木遺跡出土の黒曜石は蛍光 X 線分析による産地推定で、宮城県加美町（旧宮崎町）の湯の倉産が大半を占めており（栗島編 2024：31 - 36 頁）、同産の黒曜石は内陸部の遺跡にもたらされている。石鏃の石材となった鉄石英・メノウ・玉髓等も他地域から材木遺跡に持ち込まれ、製品化されていたことが判明した。

石材資源に乏しい向町盆地で、材木遺跡が装身具や石鏃等の製作・製品化の拠点になった理由は定かでないが、他遺跡よりも緑色石英の鉱床の至近に位置していた可能性は高いであろう。同盆地は縄文時代を通して東西物流の経由地として機能しており、晩期では主要経路の小国川沿いから若干離れた各支流沿いに遺跡が展開していた。盆地内では白川沿いのげんだい遺跡で墓域が確認され、狐穴口遺跡で緑色石英の剥片が表面採集された程

度で、その他の晩期遺跡の内容は未詳の状況にある。各支流の有力遺跡を材木遺跡のように吟味して、盆地内における遺跡相互の関係を明確にすることができれば理想的であろう。

緑色石英の分布を見ると、材木遺跡を中心に半径 50 km 圏内外の遺跡に拡がっており、大洞 C2～A 式期の流通圏が暗示される。同期には瓢箪形の土製赤彩小玉やキノコ形耳栓(図 13 下段)といった東北中部に特徴的な装身具類がより広範に分布しており、往時の社会背景を考究する上での好適な資料が少なくない。それぞれの遺物の帰属時期と分布状況の明確化が重要な課題であり、今後の研究の進展に期待したい。

東北地方の晩期は亀ヶ岡文化として一括りにされるが、地域毎に多様な在り方が認められる。筆者はこれまで地理的単元に則して幾つかの地域で検討を進めてきたが、本稿もその一環をなすものである。遺跡情報の精度に問題をほらむものの、地域社会を考える上で最も基本となる研究手段であり、このような地道な作業を通して亀ヶ岡文化の理解を深化させたいと考えている。

#### (謝辞)

本稿の執筆は、材木遺跡の発掘調査への参加が契機になっています。調査の機会を設けていただいた栗島義明・三澤裕之の両氏に感謝申し上げます。この調査には山形県埋蔵文化財センターから菅原靖男専務理事をはじめ、植松暁彦・菅原哲文・大場正善の各氏が参加しており、同遺跡の調査に関して種々のご教示をいただきました。また作図に当たっては、同僚である水戸部秀樹・草野潤平氏にご指導を賜りました。図 15 の山王冢遺跡出土土器一覧の改編に際しては、資料の報告者である須藤隆先生からご快諾いただきました。重ねて御礼申し上げます。

#### 註

- 1) 発掘調査報告書では、A 区で検出された口頸部が外折し肩の張った底部穿孔の埋設土器 EU45 (山形県教委 1988 : 第 16 図 22) が、弥生時代前期の甕に比定されている。口縁部の横ナデ調整と頸部のクサビ状の刺突列が根拠に挙げられている。しかし実見すると、刺突列は形骸化した「溝底の刺痕」にも見受けられ、大洞 C2～A 式の位置づけが妥当と思われる。なお弥生時代前期の土器として、(註 7) で取り上げた凸湾部を持った筒形の土器が紹介されている (佐藤 2005 : 第 8 図 13)。
- 2) 山形県 H P で公表された最新の『山形の宝マップ』の材木遺跡は、実際の位置から約 200 m 北東方向に離れて図示されている (図 1・2 : グレーのマーク)。この誤った位置情報は、

1978 年刊行の『全国遺跡地図 6 山形県』(国土地理協会)と同年の『山形県遺跡地図』(山形県教育委員会)を踏襲したものである。なお遺跡範囲が円形に表示してあるのは、前書のドットをラインに置き換えたため、遺跡の面積は 1,500 m<sup>2</sup>程度である。

- 3) 図 3 の宮城県内の晩期遺跡については、(小林 2008 : 図 2)、(小林 2018 : 図 11・12)、(小林 2023 : 図 4) に基づいてプロットし、前記の図郭外は『宮城県遺跡地図情報』<<https://www.pref.miyagi.jp/site/maizou/bunkazaimap.html>> (2024 年 4 月アクセス) で補足した。なお加美町所在の葉菜山遺跡群は、No. 9・14・15・18・23・26 遺跡が晩期遺跡に該当するが、同一遺跡内の別地点として 1 遺跡のみプロットした。図 3 の山形県内の晩期遺跡については、(小林 2001) に基づいてプロットし、それ以降の発掘調査事例を追加した。なお正確な位置情報が不明な遺跡は割愛した。
- 4) 金子昭彦氏によると、「瓢箪小玉」は 1 cm 未満で、下が突出して上下二段になっており上部に貫通孔を持つ土製品である。大洞 C2 式後半～A1 式期に限定され、東北北部では青森県の源常平(第 18 号土坑墓)・宇鉄・二枚橋(2) 遺跡、秋田県の狸崎 A (48 号土坑墓)・平鹿遺跡、岩手県の九年橋・千刈遺跡が列挙されている(金子 2016 : 235 頁)。青森県以外の遺跡は北緯 40° 以南に位置しており、筆者の東北中部に該当する。なおこの小玉には外面中央に沈線・凹線を巡らした土製小玉(図 13 - 19 ~ 43) が伴う。これ等の土製玉類(土製小型垂飾)は山王冢遺跡で 399 点出土しており(上條編 2021)、分布の主体が宮城県北西部(北小松・根岸・摺萩遺跡で出土)にあったことは確実であろう。
- 5) いもり塚周辺遺跡の近隣では、図 11 に図示していないが、西方約 300 m の岩崎古墳群(1 区)で大洞 A 式の土器片、北方約 300 m の小野横穴墓群小高支群(C-2 区)で大洞 A 式の土器片が出土している(大崎市教委 2021b)。
- 6) SK46 の独鈷石(図 12 - 7) は粘板岩製で、中央付近以外が被熱によって変色しており、刃部には刃こぼれや潰れの使用痕が指摘されている(宮城県教委 2014 : 第 2 分冊 124 頁)。
- 7) 図 17 - 9 のように口縁部が外反し胴部上端(頸部)が凸湾した長胴の深鉢形土器は、東北中部に特徴的な弥生土器の種類型で、特に山形県内陸部の北半に優品が分布する。当該域では弥生時代前期山王 IV 上層式(東根市蟹沢遺跡・大蔵村上竹野遺跡 SK302) → 同前期末青木畑式(大蔵村上竹野遺跡 SK511) → 同中期初頭山王 III 層式(東根市小田島城跡) の 3 型式にわたる変遷が確認できる。
- 8) 大型浅鉢を伏せた大洞 C2 古式の事例として、1996 年調査の岩手県大船渡市大洞貝塚が挙げられる(大船渡市教委 1997 : 76 頁図 23)。B 地点と D 地点間の丘陵鞍部南斜面部の調査で、大洞 C2 式の埋葬人骨 5 体(男性 3 体・女性 2 体) が検出されたが、そのうち 4 号人骨の膝付近に口径 35 cm 超の大型浅鉢が伏せた状態で埋置されていた。4 号人骨は下肢のみ検出されたが男性の可能性が高く、頭位方向は北位と推定され、土坑の底面にシルト質褐色土が貼り付けられていた。土器の体部文様は縄文地に沈線文様で構成され磨消手法を伴わないが、「独立並置型ネガ文様」(高橋 1993) に近似した区画がみられることから、大洞 C2 古式に相当する。
- 9) 縄文中期前半期(大木 7a 新～8a 式期)には、向町盆地が「西ノ前型土偶」の主体的な分布域であったのに対し、宮城県北西部が北上川水系の「西田型土偶」の分布域となっており、両地域間には土偶祭式において差異が存していた。但し宮城県北西部の該期の土偶資料は極めて少ない状況にある。また縄文時代終末期の土坑墓群が確認された宮城県栗原市嘉倉貝塚(築館町教委 2003) と埋葬人骨が多数検出された岩手県一関市貝島貝塚(山田・米田 2023) には、伏鉢墓を見出すことができない。この 2 遺跡は迫川水系の湖沼地帯(石巻平野)に位置しており、伏鉢墓は大崎平野周辺に限定的な葬法であった可

能性が考えられる。

#### 引用文献

- 相原淳一・飯塚義之 2020 「宮城県栗原市上堤遺跡出土の」字状石製品と大崎市根岸遺跡出土の管玉ほか玉類『東北歴史博物館紀要』21 pp.45-55 東北歴史博物館
- 相原淳一・上條信彦・片岡太郎・佐々木理 2021 「宮城県大崎市根岸遺跡 6a 層出土遺物の調査」『東北歴史博物館紀要』22 pp.29-34 東北歴史博物館
- 秋田県教育委員会 1988 『虫内 I 遺跡—東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 XⅢ—』(秋田県文化財調査報告書第 274 集)
- 石巻市教育委員会 2020 『立浜貝塚—石巻市雄勝町立浜地区防災集団移転促進事業に係る発掘調査報告書—』(石巻市文化財調査報告書第 15 集)
- 伊東信雄・須藤隆 1985 『山王岡遺跡図録』一迫町教育委員会
- 大石田町教育委員会 1993 『分布調査報告書(2)—玉ノ木平 A 遺跡発掘調査報告書—』(大石田町埋蔵文化財調査報告書第 5 集)
- 大石田町教育委員会 1997 『分布調査報告書(6)』(大石田町埋蔵文化財調査報告書第 9 集)
- 大崎市教育委員会 2015 『矢根八幡遺跡』(宮城県大崎市文化財調査報告書第 21 集)
- 大崎市教育委員会 2021a 『通木田中前遺跡—田尻中央地区ほ場整備事業に係る発掘調査報告書—』(宮城県大崎市文化財調査報告書第 41 集)
- 大崎市教育委員会 2021b 『いもり塚周辺遺跡ほか—江合左岸地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書—』(宮城県大崎市文化財調査報告書第 43 集)
- 大竹正巳 2000 「栗駒南部地熱地域、赤倉カルデラの層序と火砕流噴出・陥没様式」『地質学雑誌』第 106 巻第 3 号 pp.205-222 日本地質学会 <[https://www.jstage.jst.go.jp/article/geosoc1893/106/3/106\\_3\\_205/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/geosoc1893/106/3/106_3_205/_pdf/-char/ja)> (2024/04/08 アクセス)
- 大船渡市教育委員会 1997 『岩手県大船渡市大洞貝塚 平成 6・7・8 年度範囲確認調査概報』大船渡市教育委員会
- 大類 誠 1996 「山形県尾花沢市漆坊遺跡出土の製塩土器」『山形考古』第 5 巻第 4 号(通巻 26 号) pp.35-38 山形考古学会
- 岡村道雄・柳沢和明 1985 『江合川流域の旧石器—宮城県江合川流域旧石器時代遺跡分布調査報告書—』(東北歴史資料館資料集 14) 東北歴史資料館
- 小野章太郎編 2021 『北小松遺跡ほか—田尻西部地区ほ場整備事業に係る発掘調査総括報告書—』(宮城県文化財調査報告書第 255 集) 宮城県教育委員会
- 尾花沢市教育委員会 1982 『漆坊遺跡発掘調査報告書』(尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集)
- 金子昭彦 2016 「津軽海峡圏の装身具の変遷—青森県を中心として—」『第 1 分科会 津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』pp.223-244 日本考古学協会 2016 年度弘前大会実行委員会
- 上條信彦編 2021 『国史跡山王岡遺跡の研究 II 石器・石製品・土製品・骨角器編』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター
- 栗島義明編 2024 『山形県最上町材木遺跡—縄文時代晩期攻玉遺跡の調査—』(2022 年度～2025 年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書) 明治大学黒耀石研究センター
- 小島圭二・田村俊和・菊池多賀夫・境田清隆編 1997 『日本の自然地域 2 東北』岩波書店
- 小林圭一 2001 「最上川流域における縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』第 7 巻第 1 号(通巻 31 号) pp.21-81 山形考古学会
- 小林圭一 2008 「遺跡分布からみた亀ヶ岡文化期の地域相—宮城県北半・山形盆地・青森平野を例として—」『考古学』VI pp.84-118 安齋正人編
- 小林圭一 2010 『亀ヶ岡式土器成立期の研究—東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式—』早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所
- 小林圭一 2018 「松島湾における縄文時代晩期の遺跡動態」『研究紀要』第 10 号 pp.23-42 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2019 「山形県北東部における縄文時代中期の遺跡動態—西海淵遺跡と西ノ前遺跡を中心として—」『研究紀要』第 11 号 pp.33-60 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2023 「縄文時代晩期における大洞貝塚の学史的意義」『研究紀要』第 15 号 pp.23-48 山形県埋蔵文化財センター
- 佐藤祐輔 2005 「砂子田遺跡が投げかける問題」『山形考古』通巻 35 号 pp.1-32 山形考古学会
- 新庄市 1989 『新庄市史 第一巻 自然・原始・古代・中世編』菅原哲文・長澤友明 2018 「上竹野遺跡出土の土偶」『研究紀要』第 10 号 pp.43-56 山形県埋蔵文化財センター
- 須藤隆編 2007 『東日本縄文・弥生時代集落の発展と地域性—平成 17～18 年度科学研究費補助金基礎研究(C)(1)研究成果報告書—』(課題番号 17520515) 東北大学大学院文学研究科
- 仙台市教育委員会 1990 『赤生津遺跡—赤生津遺跡発掘調査報告書—』(仙台市文化財調査報告書第 139 集)
- 高橋龍三郎 1993 「大洞 C2 式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』第 5 号 pp.83-151 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 田宮良一・山形応用地質研究会 2016 『山形県地質図(10 万分 1) 最上地域』山形大学出版会
- 築館町教育委員会 2003 『嘉倉貝塚—平成 13・14 年度重要遺跡範囲確認調査報告書—』(築館町文化財調査報告書第 16 集)
- 藤沼邦彦・秋山真吾編 2007 『亀ヶ岡文化遺物実測図集(3)』(弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 5) 弘前大学人文学部日本考古学研究室
- 三澤裕之 2020 「最上町材木遺跡から採集した緑色の石英について—縄文時代終末期の東北地方中南部地域における物流に関する一考察—」『山形考古』第 49 号 pp.1-11 山形考古学会
- 三澤裕之 2023 「緑色石英製玉類の生産と流通」『最上地域の縄文時代』pp.76-83 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 水戸部秀樹 2004 「山形県の縄文時代後期前半の土器について—かっぱ遺跡を中心に—」『研究紀要』第 2 号 pp.1-28 山形県埋蔵文化財センター
- 宮城県企画部土地対策課編 1991 『土地分類基本調査 岩ヶ崎』宮城県企画部土地対策課
- 宮城県教育委員会 1980 『東北自動車道遺跡調査報告書 III』(宮城県文化財調査報告書第 69 集)
- 宮城県教育委員会 1981 『宮城県園場整備関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和 55 年度)』(宮城県文化財調査報告書第 75 集)
- 宮城県教育委員会 1982 『青木畑遺跡』(宮城県文化財調査報告書第 85 集)
- 宮城県教育委員会 1985 『香ノ木遺跡・色麻古墳群—昭和 59 年宮城県園場整備関連遺跡詳細分布調査報告書—』(宮城県文化財調査報告書第 103 集)
- 宮城県教育委員会 1986 『田柄貝塚 I・II・III』(宮城県文化財調査報告書第 111 集)
- 宮城県教育委員会 1990 『摺萩遺跡』(宮城県文化財調査報告書第 132 集)
- 宮城県教育委員会 2014 『北小松遺跡—田尻西部地区ほ場整備

事業に係る平成 21 年度発掘調査報告書—第 1・2・3 分冊』(宮城県文化財調査報告書第 234 集)  
 宮城県教育委員会 2019 『大久保貝塚ほか』(宮城県文化財調査報告書第 250 集)  
 宮城県教育庁文化財保護課編 1977 『巻堀遺跡』 一迫町教育委員会  
 最上町教育委員会 1986 『楯の裏遺跡』(最上町文化財調査報告書第 1 集)  
 八木勝枝 2004 「北上川中・下流域の盛土遺構—縄文時代晩期包含層分析からの一視点—」『岩手考古学』第 16 号 pp.45-64 岩手考古学会  
 山形県教育委員会 1984 『水木田遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 75 集)  
 山形県教育委員会 1980 『水上遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 27 集)  
 山形県教育委員会 1981 a 『熊の前・来迎寺遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 34 集)  
 山形県教育委員会 1981 b 『水上遺跡第 2 次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 40 集)  
 山形県教育委員会 1986 『分布調査報告書(13)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 96 集)  
 山形県教育委員会 1987 『生石 2 遺跡発掘調査報告書(3)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 117 集)  
 山形県教育委員会 1988 『びんだい遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 128 集)  
 山形県埋蔵文化財センター 1995 『宮の前遺跡第 2 次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 19 集)  
 山形県埋蔵文化財センター 1999 『宮の前遺跡第 3 次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 65 集)  
 山形県埋蔵文化財センター 2003 a 『砂子田遺跡第 2・3 次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 113 集)  
 山形県埋蔵文化財センター 2003 b 『かっぱ遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 114 集)  
 山形県埋蔵文化財センター 2003 c 『釜淵 C 遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集)  
 山形県埋蔵文化財センター 2019 『上竹野遺跡第 1・2 次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 234 集)  
 山田康弘・米田穰 2023 「岩手県蝦島貝塚出土人骨の埋葬属性と mtDNA・年代測定の分析結果からみた縄文墓制の一樣相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 242 号 pp.15-33 国立歴史民俗博物館

#### 図版出典

図 1：国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図「瀬見・向町・月楯・羽前赤倉」に相当する『電子地形図 25000 (オンデマンド版)』(2023 年 12 月 16 日調整) を 33.33% に縮小しベースとして、山形県が提供する『山形の宝マップ』

<<https://y-bunkazai.maps.arcgis.com/apps/webappviewer/index.html?id=b72c4d00dd3b43279c040774bd043fc4>> (2024/04/04 アクセス) を参照して遺跡をプロットした。なお向町カルデラ外輪と赤倉カルデラ外輪の推定線については、『山形県地質図』(田宮・山形応用地質研究会 2016) を参照した。

図 2：図 1 の『電子地形図 25000 (オンデマンド版)』(2023 年 12 月 16 日調整) をベースに山形県発行『土地分類基本調査 1:50,000 地形分類図 鳴子・葉菜山』を参照して作成した。

図 3・4：国土地理院発行(1996 年 3 月)「1:500,000 地形図(3) 東北」をベースに作成した。遺跡のプロットについては註 3 に注記した。

図 5：国土地理院発行『1:50,000 地形図 大沢・羽前金山・秋ノ宮・清川・新庄・鳴子・月山・尾花沢・葉菜山』をベースに、山形県発行『土地分類基本調査 1:50,000 地形分類図 大沢／湯沢・羽前金山・秋ノ宮／清川／新庄／鳴子・葉菜山／月山／尾花沢』を参照して作成した。

図 6：(小林 2019：図 5) 改変。

図 7：国土地理院発行『数値地図 50000 (地図画像) 宮城・山形』をベースに、山形県発行『土地分類基本調査 1:50,000 地形分類図 遊佐・鳥海山／酒田／大沢／湯沢・羽前金山・秋ノ宮／三瀬・温海／鶴岡／清川／新庄／鳴子・葉菜山／湯殿山／月山／尾花沢／勝木・大鳥池／左沢／楯岡／関山峠・川崎／塩野町・朝日岳／荒砥／山形／小国・手ノ子／赤湯・上山／飯豊山・大日岳／玉庭・熱塩／米沢・関／吾妻山・福島』を参照して作成した。

図 8：(尾花沢市教委 1982：第 34 図) 改変。

図 9-1：(大類 1996：第 1 図)、2：(山形県埋文セン 1996：第 98 図)。

図 10：(小林 2018：図 8) 改変。

図 11：国土地理院発行『電子地形図 25000 DVD 版 宮城県』(2017 年 11 月 24 日作成) の該当地図をベースに、国土地理院ホームページで公開する『治水地形分類図更新版(2007～2016 年)』(<<https://maps.gsi.go.jp>>)、地質調査総合センターホームページで公開する『5 万分 1 地質図幅 岩ヶ崎』(<GSJ\_MAP\_G050\_06068\_1997.zip> (2018/07/10 アクセス) を参照して作成した。

図 12：(宮城県教委 2014：第 1 分冊) から作成。

図 13-上段：(宮城県教委 1981) から作成、下段：(宮城県教委 1990) から作成。

図 14：(宮城県教委 1981：第 7 図) 改変。

図 15：(伊東・須藤 1985) の付図 1・2 (山王岡遺跡層位別土器組成) を 1 枚に編集し、土器に通し番号を付した(付図に縮尺の明示がなかったため 1/3 を前提に作成)。

図 16：(仙台市教委 1990) から作成。

図 17：(宮城県教委 1982) から作成。

写真 1：(小林 2010：巻頭写真 1) 改変。